
エはエーゲ海のエ ~ギリシア旅日記~

水森盛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エはエーゲ海のエーギリシア旅日記

【Nコード】

N0077F

【作者名】

水森盛

【あらすじ】

作者自身が2005年に訪れたギリシアの旅日記です。旅先で出会った人々…忘れられない出来事を、小説とは違った視点で描いています。

初日 AM

日本国から僕を乗せた飛行機は、早朝のアテネ国際空港に降り立った。

自らの足でタラップを踏みしめると、僕は神話の国、ギリシアの空気を胸に吸い込む。

「さて、ついに来てしまったか…」

独り言のように呟くと、僕はこれからの旅の相棒、10年来の付き合いになるリュックサック（かなりボロい…）を受け取るため、空港のロビーに向かった。

僕が今回の旅にギリシアを選んだのは、パルテノン神殿を始めとする遺跡が見たかったから。

元々遺跡が好きで、今までに世界各国の様々な遺跡を見て、その度に言葉に出来ないくらいの感動を貰っていた僕は、まだ自分が行っていない遺跡の中で、最も有名どころになるギリシアの地を選んだのだ。

きつとまた素晴らしい感動が待っている…僕は期待に高鳴らせると、自分の全てを詰め込んだリュックを軽々と背負い、税関に向かった。やましい事は何も無いのだが（本当に）…少し緊張しながら無事税関を抜けると、空港から出て、本当の意味でのギリシアの地に足を踏み入れた。

ここから僕の旅が始まるのだ…

まだ真っ白で、何も書き込まれていないノート…それが僕の『今』である。このノートに今から何を書き込むのも僕の自由だ。

…でも、その自由って言うのが本当にやっかいで…特に一人旅の場合、その全てを自分で決め行動する事になるので、良い事も悪い事も全て自分に降りかかってくる。

まあ、当たり前といえば当たり前前の事だけ…

まだ春先のせい、少し肌寒い…
陽光に晒された空港を一度振り返ると、僕はアテネまでのバスに乗るためにバス停に向かった。
もう旅が終わるまで空港に戻る事は無い…ここを出ると、あとは全て自分自身の手で旅を創るのだ。
そう自分に言い聞かせながらバスに乗ると、僕は首都アテネに向かった。

バスは一時間程でアテネの中央、シントグマ広場に到着した。
かなり近代的で賑わいを見せる街並みは、僕の住んでいる大阪、もしくは過去に行ったスペインのマドリッドに近い…そんな感じ、どこことなく親近感を覚えた。

平日のせい、出勤途中の人々が目に付く通りをぶらぶらと歩き、屋台で売っているクルーリと言うごまパンを買って食べる。

これが中々香ばしくて美味しい…まあ、異国に来て最初は殆どの例外なく、日本以外の新しい食べ物…と言うフラシーボ効果で『美味しい』と感ぜてしまうのだが…

道行く人に、何年も上達しない英語で「アクロポリスは何処？」と聞きながら、教えられた方向に足を進めると、少しづつビルが減っていき、緩やかな階段状の道と、その脇に並ぶレストラン、みやげ物などのお店が目立つようになり、そこを登っていくと、その先（頂上）には一見して『それ』とわかるような遺跡群が見えるようになった。

早朝のせい、人がまばらな登り坂を、はやる気持ちの急ぎ足で登り…僕はついにアクロポリスにたどり着いた。

遺跡にはエントランスがあってそこから入場するのだが、パルテノン神殿はもうでかかと僕の前に姿を見せていた。

テレビや写真で見た壮大な遺跡…過去に訪れてエジプトのピラミッ

ドヤペルーの天空都市マチュピチュを前に感じた感動に再会！
…と思いきや、それがどうして…意外にも僕が求めていた感動は無く、ただ淡々と「ああ、これがあのパルテノンか」と言うくらいのものだった。

『何故？』心が躍動しない自身自分に質問するが、答えが見つからない。

かつては遺跡を前にすると心が震え、その偉大さに…同時に自分のちっぽけさに涙が出てしまうくらい、感受性豊かだったのに…肩透かしを食らったように、僕は落胆する…

『遺跡のせいではなく…ひょっとして、僕自身が心の枯れた大人になってしまったのか…？』

そんな事を考えながら、僕は今回の旅にこの国ギリシアを選んだ事を後悔し始めた。

記念すべき旅先の一ページなのに…始りがこれでは、この先どうなってしまうのだろうか…？

肩に食い込むリュックの重たさを感じながらも僕は首を振り、マイナス思考を振り払う。

いや、まだまだ旅は始まったばかり、これからきつと素晴らしい冒険が僕を待っている！

そう自分に言い聞かせると、相棒のリュックを担ぎなおし、エントランスをくぐると、朝日に浮かぶパルテノン神殿に向かった。

初日 AM

ギリシア初日、アテネのアクロポリスにたどり着いた僕は、遺跡へのエントランスをくぐった。

まだ早朝と言う事もあって肌寒い。パルテノン神殿までの道を歩きながら、僕は目に見える風景を視界の中に吸収する。

紀元前600年頃、このパルテノン神殿を始めとするアテネを中心に、ポリスと言う都市国家が栄えた。

ペルシアとの闘いに勝利したギリシアは、アテネをそのリーダーとして、多数のポリスとス同盟を結んだ（デロス同盟）。

当初、平等で上手くいっていた各ポリスとの関係であったが、次第にアテネの権力が増していき、アテネは各ポリスに過酷な重税を要求するようになり、それに従わないポリスには徹底した罰（ポリスの男全て処刑等）を与え、その恐怖によって他のポリスを従わせていった。

『歴史は繰り返される』僕は次第に権力を増していき正義を失っていったアテネに、どうしても現在のアメリカ合衆国の姿を重ねてしまふ…

今アメリカが世界の権力なりつつあり、それに従わない国を、見せしめのように攻撃する。

だが、その力の大きさにどの国も抵抗できずに従うしかなく、それがまた増長を生み…みたいなスパイラスに入っているような気がするのだが。

…でも、繰り返される歴史から言うと、最後には大きくなりすぎた権力は間違いなくその終点『崩壊』へ到達する。

僕は石段の道を歩きながら、ふとそんな事を考えていた。

観光客の殆どいない敷地内を進むと、どんとパルテノン神殿が大きくなって、やがて僕はその目の前に立ち止まった。

朝日の中に浮かび上がる神殿は想像したよりも遥かに大きい。でも…そこからは何も感じなかった。

数年前に訪れたマチュピチュ遺跡なんかは、かつてのインカ帝国の人々が今にでもゾロゾロと出てきそうな、遺跡に宿る『生命』みたいなものを感じたのに。

神殿修復工用のクレーンと、遺跡の周りに足場が組まれていたので、どことなく歴史と現代が入り混じった違和感があったのか、遺跡の持つ『生命』が失われているのか…

僕はパルテノン神殿の周りを歩きながら、神殿以外の目新しいものを探す。神殿の一番奥まで行くと、そこからは丘の下に広がる遺跡とアテネの街並みが見下ろせる。

僕はしばらくそこでぼうつとしたに広がる遺跡の、その向こうにある現在の街並みを眺めながら『さて、これからどうしたものか…』を考えた。

今回の旅の最大の目的は遺跡と、あとはエーゲ海…目的の一つである遺跡を見てしまい、ここで旅の目的が大方達成されてしまった。

初日の午前中に…である。あとの一週間、何を目指せばいいのやら…目の前にある問題としては今日である。今日一日はアテネで遺跡を見て周り、夜は市内で宿をとって明日に別のところへ移動する考えでいたが、今の感じでは残りの遺跡をすべて見ても午前中で終わってしまいそうである…（汗）。

…と、なると旅の第二の目的であるエーゲ海に向かうべきか。僕は遺跡を歩き回りながら次なる目的の地を頭の中で探していた。

それから円形劇場、遺跡周りの道をぶらぶらと歩き…アクロポリスを後にして、アテネ市内に向かった。

この旅のガイドブックとなる『地球の歩き方』に載っていた、日本人の経営するホテルに行けば、何かしらの情報が得られるからと思っただけだ。

それにもしアテネで今夜泊まるなら、宿を確保しておくに越した事は無い（いつもは旅先に到着してすぐにその日の宿を確保しておくのだが、今回は何となく予感があったのか、それをしていなかった）。

丘を降り地図を見ながら、かなり歴史を感じる大きなビルの一角にそのホテルを見つける。中に入ると50前後くらいの日本人のおじさん（経営者）が僕を迎えてくれた。

おじさんは、僕が午前中アテネを歩いてきた話をする。『それだけ見たら、もうあまり見るものは無いよ』と、アツサリと言いきり『じゃあ、夕方の船でエーゲ海に出てみたら？』と、助言してくれた。それはほぼ僕の考えていた事と一致していたので、僕はエーゲ海にあるギリシア文明発生の地、クレタ島に向かう事にした。

ギリシアでは夏の観光シーズンと冬のオフシーズンでは、エーゲ海を行き来する船の便、飛行機の便が全然違う。僕が行った時期はまだギリギリオフシーズンだったので、船便も少なく、夕方の六時くらいにならないとクレタに向かう船便が無いとの事。

今からだあと六時間以上。旅先で電車やバスを待つのに結構慣れていたが、さすがにこれは長い…

でも、宿に泊まらない以上ホテルには居場所が無いので、僕はおじさんに礼を言つて、ホテルを後にした（本当は荷物を全て下ろして休息を取りたかったが）。

あてもなくアテネの市外を歩き回り…とりあえずお昼ごはんでも食べようと、僕はなるべく安い店を探す。

僕自身が貧乏旅行者である事と、それに…観光客が賑わうお店より、地元の下町にあるような小さなお店の方が、その国の本当の味が食べられる…と、今までの経験で実感していたから。

当然のごとく僕の足取りも、観光客が多い市内よりも、地元の人で賑わう下町？の方に向いていた。

初日 PM

アクロポリスの丘を見上げる所に、地下鉄のモナスティラキ駅がある。

アテネの中心、シンタグマ駅から一駅の場所にあるその駅周辺は、オフィス街とは様変わりして、

飲食店やみやげ物売っている店が並び、地元のギリシアの人、各国からの観光客が入り混じって、賑わいを見せている。

僕は夕方までの数時間（長い…）、どう時間をつぶすかを考える。とりあえず何か食べよう。僕は商店街を歩き、なるべく地味で安そうな店を探した。

ギリシアの食べ物と言えば…思いつくところでオリーブ、フェタ（ヤギのチーズ…と思う）、ムサカ、あとはエジプト、トルコなんかでメジャーなピタ。

ピタと言うのは、ナンのような柔らかいパンに、シシカバブ（肉）、玉葱、トマトなんかを挟んだもので、結構安くて人気があり、そしてポリウムもある。

僕はとりあえずピタを求めて歩く。メジャーな料理のせいか、駅前の広場にあるマクドナルドなんかに、このピタがメニューとしてあった。

僕はマクドナルドの近くにあり、わりかし人で賑わっているレストランでピタをテイクアウトして、広場で食べる。

広場で人の通りを眺めていると、そこには何でもない日常の風景があった。子供の手を引いた家族連れ、お洒落をした学生達、恋人…皆とても楽しそうで、僕は少し寂しい気分になる。

旅（海外）に来て初日は、どうしてもそういうナーバスな気分になつてしまう。これから自分は旅を描いていく事が出来るのかな…

今頃、日本にいる僕の知人達はどうしているのかな…現実に故郷が何万キロの彼方にあるのを実感する時でもある。

ちなみに余談だけど…こう言う時って、とても人肌恋しくなる…と
言うか、ストリートに言うと、とても性欲が強くなり、誰かと肉体的
に交わりたくなる。

自身の経験で、これはほぼ間違いなく、どの旅でもそう言う心境に
陥った…これは僕だけの特殊な事なのだろうか…

地中海の太陽を浴びたみずみずしいトマト、ジューシーな肉を堪能
した僕は、賑わいを見せる街並みを歩き、土産物を物色する。

アクロポリスの丘まで続く道には、たくさんのオープンカフェが並
び、昼も近いせいか観光客がぎっしりとそのテーブルを占領するよ
うになっていた。

日本人を見かければ何とかコンタクトしようと思ったけど、あいにく
見つける事が出来なかつたので、猫を探す事にした。

猫は街中のいたるところにいた、飼われているもの、野良、その中
間に当たるもの…

重いリュックを背負い疲労もしていたが、彼達に触れ、その笑顔を見
ていると心が和み、つい自らも笑い、話し掛けてしまう。

店に入り土産を見て、街中を歩いて通りを覚え、人々を観察し、何
度も時計に目をやるが、中々時間が経たない。

ピレウスの港から船が出るのが午後7時…今からだと、まだ5時間
以上ある…(汗)。

あてもなく路地を歩き、パルテノンと向かい合う丘にある神殿を見
て…ついにやる事が尽きた僕は、モナスティラ駅から電車に乗り、
ピレウスに向かう事にした。

初日 PM

モナスティラ駅からピレウスまでは、電車で約一時間と言った所だろうか。

地下鉄の駅から電車に乗った僕は、リュックを下ろすと電車のシートに腰をおろす。

電車には学生らしい男女が乗り込んでいて、楽しそうに話している。日本人の僕を見てもさほど珍しそうな様子はない。

電車は地下から地上に出て、車窓から流れる街並みの風景が見える。僕にとって目新しい風景も、彼らには何でもない日常なんだな…

とそんな事を考えながら、学生達の会話を何気に聞いていた。まあ、聞いても内容なんか、さっぱりわからないんだけど…

ピレウスについて電車を降りた僕は、駅周辺の散策をする。目の前にあるピレウス港はとっても大きな港で、ここからエーゲ海の島々、トルコ、イタリアにも行けたりなんかする。

駅の周辺のツーリストに入った僕は、まずトルコ行きの可能性を探ろうと、やたら愛層のいい受付のおじさんに尋ねる。

すると…オフシーズンにもかかわらず、トルコ行きの船があった。身を乗り出しおじさんから話を聞く僕。

何々…？ここ（ピレウス）からフェリーで22時間…（汗）。駄目だ…そんなに長くフェリーに乗っている忍耐と気力は無い。

じゃあやっぱりクレタ島か…僕はおじさんからクレタ島行きの船の出る船着場の場所を聞くと丁寧に礼を言い、ツーリストを出た。

駅前のカフェ、色々なお店を回り何とか時間を潰した僕は、クレタ島行きの船着き場に向かう事にした。

でも、歩けど歩けど一向に船着き場に辿り着かない…遠いのだ。

このピレウス港、上から見るとカタカナの『コ』の文字みたいな形

をしていて：僕がいた場所、向かっている船着き場はこの『コ』の文字の端から端を歩くような感じで、おそらく一キロ以上の距離があるだろう（いや、体感的にはもっと？）。

重いリュックを背負い、何とか船着き場にたどり着いた僕は、これから自分が乗船するフェリーを見上げる。

到着まで9時間を共にする船はさすがに大きく、迫力があつた。フェリーに乗るなんて何年ぶりだろう？最後に記憶があるのって、小学生くらいじゃなかったっけ。

僕は船着き場にある小さなチケット売り場でチケットを買い、夜を越すための食糧：お菓子をいくつか買って、フェリーのタラップを上って行った。

クレタ島行き客船に乗り込むと、僕のチケットで入れる二等（安いセカンドクラス）船室に向かった。

あまりいい部屋を期待していなかったが、実際にその通りで…小さな映画館と表現したらいいだろうか。大きなテレビを正面に見るようにして何十もの椅子が並んでいる。

明らかに、これから夜を明かすには適さない大きさと背もたれであったが、仕方がない…僕は真ん中あたりに席を取ると、ぼんやりとテレビのモニターを見ていた。

客数は少なくまばらなので、船が出発したら両隣の椅子は占領しよう。

静かな振動と共に、船はクレタへと向かって動き出した。

窓が無いので外も見ることができず、僕はただ椅子に座るしかなかった。

退屈である…しばらくして船内を歩き出すと、船の真ん中あたりにある喫茶店バーカネで、

飲み物を買ってその店員さんに『サントリーにとミコノス、どっちが良い所？』と聞く。すると頭の薄くなったオジサンは魅力的な笑顔を浮かべて『どっちも良いよ』と答えてくれた。

うーん…そう答えられると困るんだけどなあ…

船内を少し歩きまわり、ついにすることが無くなったので僕は船室に戻ると、両隣の席を有効（笑）に使い、眠る事にした。

モニターで流れている地元のテレビを眺めながら、僕は体中が痛くなりそうな窮屈な姿勢で、眠りについた。

朝、目が覚めると、予想通り体が痛かった…

痛む腰をさすりながら起き上ると、船は間もなくクレタ島のイラクリオンに到着した。

クレタ島について知っている事と言えばクノッソス宮殿…ギリシア

文明発祥の地、ミノア文明、あとは第二次世界大戦のクレタ戦線くらい。

船を下りた僕は青い空と青い海に、船室から解放の開放感で、寝不足など忘れて軽やかに歩きだした。

とりあえずクノッソス宮殿を目指そう。リュックを背負い、海を右手に見ながら道路を歩く。

クノッソス宮殿息へのバスはイラクリオンのセンターにあるバス停から出ているみたいで、僕は早朝のために人がまばらな通りを歩いて、イラクリオンの中心部に向かった。

歩く事十分くらいで街の真ん中についた僕は、そこにあるバス停のロータリーでバスを待つ。

バス停のすぐそばの通りには食道、旅行代理店が並んでいて、僕はバス停のすぐとなりのオープンカフェでバスを待つ事にした。

ギリシアコーヒー（とても濃い…）を飲みながらバスを待っていると、目の前の通りで若者達4、5人の集団と同じく中年の集団が何やら言い争いが始まった。

何だろう…？しばらく聞いてみると、どうやら軽い車の接触があった。『お前の方が悪い！』と、揉めているようであった。

殴り合いにこそならなかったけど、血の気が多いなあ…と思いつながら、僕は10年ほど前にスペインで同じようにして言い争っている若者と中年の事を思い出していた。

バルセロナからバレンシアに向かう列車の中で、僕の前に座る若者と中年が言い争いを始めたのだ。

内容は互いの故郷、どちらが優れているか…みたいな事だった。スペインでは同じ国内でも『違う国』みたいな所もあるみたいで、ここでは話す言葉も違うらしい。

故郷に抱いている誇りもとても強くて（僕達日本人には想像できないくらい）、『俺の生まれ住む故郷が一番』みたいなノリがあるみたいだ。

言い争いは周りの客をも巻き込んでエスカレートしていき、僕だけ

がわけもわからずにぽつんと取り残されていたのだが…（汗）
ヒートアップしたオジサンが僕に『お前もそう思うだろ？』みたい
に聞いてきた時に、僕はどう答えればいいのかわからず、笑顔しか
返せなかったなあ。

だって、喧嘩してるもう片方が僕の事を思いきり睨みつけていたか
ら…（笑）。でも、そんな風に熱くなれる人達に、少し羨ましいな
…と想っている自分もいた。

目の前の光景を見ながらそんな事を考えていると、僕をクノツソス
宮殿まで連れて行ってくれるバスが到着し、僕は彼等を喧嘩の結末
がどうなったのかを見る事もなく、バスの乗り込んだ。

クノッソス宮殿に向かうバスの中には、僕と後数人しか客は乗って
いなかった。

日本では想像がつかないくらい揺れたバスに揺られること約三十分、
土産物屋が二件ほど並ぶ寂しい場所に僕は降ろされた。

かなり殺風景な所である…宮殿が無ければ、間違い無く訪れない場
所だった。

僕はそこから土産物屋さんの人に道を聞き、クノッソス宮殿に向か
う。

クノッソス宮殿のエントランスにたどり着いた僕は、そこでチケット
を買おうとするが、この日（日曜日）は、無料の日らしく、フリ
ーでゲートを通過する。

宮殿の敷地内に入り看板の表示に従い歩いて行くと、目の前に大き
な宮殿跡が現れた。

ギリシア文明は、このクレタ島のミノア文明が発祥の地だとされて
いる。

そのミノア文明の王、ミノスが牛の化け物ミノタウロスを閉じ込め
るために作られたのがこのクノッソス宮殿（迷宮）らしいのだが、
これが迷宮とは程遠い簡単な作り…

果たしてこれで誰が迷うのだろうか？と思っていると、宮殿完成当
時の絵があり、それを見てようやく納得…は出来なかった、正直に
言っ…（汗）。

宮殿が何の目的で作られたかは別として、その美しさは目を見張る
ものがあり、僕は敷地内を何度も歩きまわり、美しい壁画イルカ、朱塗りの
柱を見て回った。

そこから感じるものは、とても平和でのどかなミノアの人々の様子

…自然と動物、人々との調和であった。

自然を愛し、オリーブや麦を収穫し、海上貿易で栄えたミノア文明は、実際に争い事が無く平和であったようで、クレタ島で見つかった宮殿には『城壁』が存在しない。

アテネの遺跡とは違う『優しさ』を感じながら、僕は時間の許す限り宮殿を見て回った。

敷地内の芝生の上で腰を下ろし、木々の間からのぞく太陽を見ながら僕は、当時の人達は、ここでどんな事を思い、暮らしていたのか…と考えながら時間を潰した。

子供の頃、レイ・ブラッドベリの古典SF小説『火星年代記』の映画を見た事がある。
ドキュメンタリー

今みたいにCGが無い時代の映画で、とつてもチャチな特撮（懐かしい）映像であったが、セットで作られた『火星人の都』だけは、お金がかかっていて、豪華だった。

この野外に作られたセット（石造りの宮殿的な）が結構この宮殿と似ていて（雰囲気は…ね）、そこに住んでいた火星人（死滅した）の思想、考え方が、どこことなくここに住んでいたミノス文明の人達と重なり合っているような気がした

（平和で自然を愛し、今と言う時間を一生懸命に生きる…みたいな）。

クノッソス宮殿で二時間ほど過ごした僕は、やる事も無くなったのでそこを後にし、バスに乗って再びイラクリオンに戻った。

クノッソス宮殿からバスに乗り、再びイラクリオンの街に帰る。

ギリシア文明発祥の地、その象徴であるクノッソス宮殿にも大きな感動を感じずバスに揺られていると、眠気が襲ってくる。

フェリーの決して上等では無い寝床のせいだろうか…

いや、これは海外に来てから殆どの人が経験する時差ボケであろう。必死で目を開けようとするが瞼が重くなってくる…そう言えばペル
ーから帰った時も昼夜逆転でしばらくは夜眠れなかつたっけ。

バスの振動が適度に心地よく、僕はイラクリオンに帰るまでの記憶を睡眠で飛ばした。

イラクリオンに降りバスから降りると、まだお昼前。さて何をしようか…僕はそのまま海まで歩くと、船着き場でぼんやりと海を眺めながら時間を過ごす。

正確にはする事が無くなったのだ。

クレタ島の一番の名所、クノッソス宮殿を見てしまうと、もうこの島には何も無い…そんな気がして、動くのがおっくうなっていたのだ。

リュックから取り出したガイドブックには、クレタ島の他の名所…バスで一時間くらいの所にある観光名所が載っていたが、何故か『行こう!』と言う気にならない。

『それよりもこのまま寝たい…』青い海を眺めながらそんな事を考えていると、ふと僕の肩を誰かが叩いた。

何だろう…? 僕が顔を上げると、地元の漁師のおじいさん（あくまでも僕のイメージ）二人が、自分達の食べているお菓子を僕に差し出し『食べる』と言ってくれているみたいだ。

初めて触れる地元の人の親切に僕は笑顔で礼を言うと、そのお菓子を口の中に放り込んだ。おじいさん二人は僕に微笑むと、再び二人の会話を再開させた。

なんか：疲れた心と体には、そういった小さな親切がとても嬉しく思えた。

気力を取り戻すと僕はガイドブックにユースの宿を見つけ、値段も高くなかったので、そこで休憩しようとする。

クレタ島からピレウスに戻るフェリーの出航時間は夜の七時半くらい。それまではゆっくりベッドで寝よう、いや寝たい…

イラクリオンの街の中の道路を歩き、裏路地にある小さな宿を見つけると、そこでお金を払って僕はドミトリー（大部屋）のベッドに倒れ込むようにして眠りについた。

数時間して眠りから覚めると、ドミトリーに他の客の姿を見つける。あきらかにヨーロッパ系統の一人の若者と、もう一人は…

『日本人？』そう問いかける僕に、まだ幼さを残す男の子は笑顔で頷いた。

日本語に飢えていた僕は（おそらく彼も）、人懐っこい笑顔の彼と、しばしの間母国語で話を弾ませた。

彼は東京の学生さんで、来年にはどこかの省庁（通産省かな…）に就職が決まっっていて、学生最後の旅としてこのギリシアを訪れるとの事。

正確にはアジアの方からずっと何カ月もかけて西に向かい、中東を経てヨーロッパに入り、そこでトルコを回ってギリシアに来たらしい。

まだ二十歳くらいの年齢で、そんな一人旅をしているとは何ともたくましい…（汗）。

実際、海外を旅する日本人（一人旅ね）は、大きく二種類に分けられると僕は思う。

何となく海外、一人旅に憧れ、思い切って海外を訪れたはいいけど『来てしまったよ、どうしよう…』と、一人自信無く、不安を抱えたまま旅をする僕のようなタイプと、海外に来て平然としていて、

淡々と旅をこなしていくたくましいタイプ（彼のような）。

僕が旅先で出会った日本人は結構後者の方が多くて、彼等は決して僕のように旅先で騙される事も、ぼったくられる事も無い（笑）。彼からトルコの情報を聞きながら、お互いの旅の話に花を咲かす。日本では決して接点の無い二人：でも、ギリシアと言う日本から何万キロも離れた所にいると、何故か同じ日本人と言うだけで、とても親近感が湧き、壁を作る事無く話せてしまう。

同じ日本人と言うだけで、まるで家族のように：（大げさかな）。

海外って場所は不思議です：こんなふうにとても強く『日本人』を感じる事が出来て：そして、日本にいる自分からは想像も出来ないくらい積極的な新しい『自分』も発見する事が出来ます。

（その新しい『自分』は、自分自身が一番好きになれる『自分』でもあります）。

途中から部屋にいたポーランド人も話に加わり、僕達は互いの住所を教え合い、社交辞令の再会を誓う（笑）。

夜も近くなり、学生さんは夕食を外に食べに行くとの事なので、僕はそこで彼に『さよなら』を言うと、フェリーが港に着くまでの間、再びベッドに身を沈めた。

安物の二段ベッドが、今までに感じた事のない高級ベッドのような安らぎを与えてくれた。

アテネのピレウスへ戻るための船が出港する午後七時半が近づいた頃、僕は目を覚ますと久々のマトモ？なベッドの感触を名残惜しいまま、ドミトリーを後にした。

外はすっかり夕暮れで、僕はリュックを担ぎ船が着く港を目指す。仲良くなつた日本人の男の子に町のどこかで出会うかなと思つてたけど、これは期待外れに終わった。

おそらく僕の生涯で彼と出会う事は、もう無いだろう…

港まで歩き、すでに停泊している真っ白なフェリーに乗り込むと、僕は再び狭い乗客室のシートに腰をおろした。

フェリーは明日の早朝にピレウス港に着くとの事…『さて、次の行き先は、どうしたものか…』

静かに動き出した船の中で、僕は九時間後に訪れる選択肢をぼんやりと考えていた。

アテネへは戻らないから、おのずとまたフェリーに乗る事になる。その場合、行先はミコノスカサントリーニかだ。トルコはあまりにも遠い…(汗)

両方とも世界的に有名で、その美しい風景はポスターになり、カレンダーになり、ガイドブックの一面を飾ってる。

誰もが一度は目にする風景で、サントリーニに至ってはあの『アトランティス文明』のモデルとなつた島である。

『さて…どちらにしようかな』

決めきれない事はなるべく後回しすると言う僕の習性が、そんな事は『明日に考えればいいさ』と眠りの世界に誘惑する。

まあ、起きるまでには決まってるだろう…そう考えた僕は、誘惑の

導きに従って目を閉じた。

まだ外が暗い早朝…午前五時くらいに、港の気配？を感じた僕は目を覚ます。

そのあてずっぱうな勘は見事に的中し、船はもうすぐ港に到着の所まで来ていた。

オレンジの明りに浮かぶ港に船は到着し、まだ肌寒い息を吐く僕は、再びピレウス港のコンクリートを踏みしめていた。

クレタ行きの船着き場は、前に書いたように港の入口からとても遠い（汗）。

また、あそこまで歩くのか…と、覚悟を決めた僕だったが、まだ行先は決まっていなかった。

港の入口に着くまでに決めよう…重いリュックを担ぎながらそう決心した僕だが、結局港の入口にたどり着いても行き先は決まらなかった。

港の入口の船着き場には、フェリーが二隻…僕の前に左右に並んでいた。

右がサントリーニに、左がミコノスに行く船で、出航時間はほぼ同じだった（…と思う）。

船を左右に見比べて迷う僕…（優柔不断ですねえ）。

どちらに乗るかはまだわからなかったが…ひとつだけ確信している事があった。

それは…この決断が、間違いなくこの旅のターニングポイントとなる。

心のどこかでそれはずっと思っていた…今まで色んな国を旅して歩いた経験で培われた勘みたいなものだろうか。

この前の旅で訪れたペルーでは、ペルーではなく隣国ボリビアのラパスを訪れた時に、旅の模様が一変した。

陽気な太陽と人々が、本当に優しく自分たちを迎えてくれたような

気がして…過酷だった旅が、一気に楽しいものに変化した。
まるで曇り空が一気に晴れ…まぶしい太陽の微笑みと歓迎を受けて
いるような。

そんな変化が訪れる事を…心のどこかで期待していたのかもしれない。
い。

何しろ…まだ旅の感動と言うものに巡り合っていなかったから…（
汗）

船を前にして、ずっと立ち尽くす僕…決められない…いや、心の中
ではもう大方決まってるんだ。

あとは…それを信じるだけでいい。

僕は大きく頷くと、心の思うままに自分を信じて一歩を踏み出す。

『きつとここから、僕の本当の旅が始まる…』

もし、自分の旅をあとから振り返った時…きつとそうなるだろうな
と思いつつながら、僕は自分の決めた行き先の船のタラップを駆け上
っていた。

そして…その言葉通り『その瞬間』から、僕の本当の旅が始まりを
告げた。

この旅を左右する大きな選択：おそらく日本を発つ前から心の片隅にあっただろう迷いに終止符を打った僕は客船のエスカレーターを上がり、二等船室に足を踏み入れた。

クレタ島行きほど大きくない船の二等船室は、なんと喫茶サロンの空いている席だった。

係員の指差すとおりに喫茶サロンにたどり着いた僕は、そこで空いているソファに腰をおろす。

周りのお客さん達も席につき出し、喫茶サロンのテーブルは大方満席になり乗船して少しすると、船は静かに出港した。

僕が下した決断はミコノス：理由らしい理由は無い。どちらを選んだとしても、おそらく後悔はしなかっただろう。

ただ、写真で見た白と青の美しい町並みには、どうしようもなく僕を引き付ける何かがあった。

そこにある風景の中に自分がいる姿を自然と想像できたのと：あとは大好きな猫かな（笑）。

幼い頃から実家が犬を飼っていたおかげで、ずっと犬好きだった。犬を見るだけで無条件に心が和み、気がつけば知らない犬にでも触りにいくくらいで、周りが見て呆れる程犬が好きだった。

それは一生変わる事無いと自分では確信していたのだが：ある女性と知り合って、それが変化してしまった。

細かい事はまた違う場所で文章にするとして：その女性の影響で、僕はすっかり猫好きになってしまったのだ。

それは自分自身でも驚きで：その原因となった女性自身も『信じられない…』と言うくらい、猫の虜になってしまった。

彼ら（猫）の魅力は語りきれないほどあるとして：いったん猫を好きになってしまうと、もう犬にそれ程の興味が湧かなくなった。

そんな革命が自身の中で起こったのが、つい一年くらい前で…
それが無ければ、おそらくミコノスに行きたいとも思わなかっただ
ろう。

アトランティス発祥の地、サントリー二には興味があったが…

人生の中で、自分の何かが大きく変化する事が何度かあると思う。
子供の頃苦くて不味いだけだったビールが大人になって美味しく感
じたり、嫌いだった野菜が普通に食べれるようになったり…

当たり前キヤツチボールで出来ていた友人との距離が、だんだん
と遠いものになり…

忘れる事なんて一生出来ないと言われ別れた恋人を、時間の経過
とともに全く思い出さなくなったり。

本人が望む望まないに関わらず、そう言った変化は時として無情に
訪れ…その結果、自分は少しずつ成長しているのだと思う。

でも…その変化によって僕は、確実に孤独への道のりを歩いている
ような気がする。

寂しさに誰かと一緒にいるより、一人でいる事を好むようになった。
それ程人を必要としなくなっている自分がある。

いや…正確に言つと、自分を受けいれる僅かな世界にしか心を開け
なくなつた…のだと思う。

時々この現状が正しいのか間違っているのか…わからなくなる。い
つたい僕は…どこに導かれているのだろうか…

…と、村上春樹チックなもの思ふけつてみると、船の様子が少し
慌ただしくなる…

ミコノスが近づいているのを肌で感じた僕は客室を出るとデッキに
出る。

エーゲ海の風に目を細め、エメラルドブルーの海の眺める僕の視界
の先に、その町を確認する事が出来た。

『海の中の宝石箱みたい…だ』

青い海の中に浮かぶ真っ白な町並みに、僕は思わず息を呑んでそう呟いていた。

僕が想像したどんな風景も色褪せてしまいうくらい、ミコノスの街は美しく…幻想的だった。

絵葉書の世界、おとぎの国…自分が映画主人公にでもなったような錯覚に陥った僕は、確実に近づくその幻想の風景にずっと視線を釘づけにしていた。

船はミコノスの港に到着し、僕はリュックを担ぎ海の中の宝石箱の地を踏みしめた。

自分の中に、あの…旅の流れが変わる感覚が訪れている事をはっきりと感じる事が出来た。

『ようやく旅が始まった…』

少し笑みを零しながら自分にひとつ頷く僕…

その言葉を『旅の神様』が聞きつけたかのか…今回の旅最大の『出会い』が、僕自身に訪れようとしていた。

三日目 AM 出会いは突然に？

船のゲートが開くと僕は、エーゲ海の宝石箱、ミコノスの地を踏みしめる。

島全体が僕達を歓迎しているようで…足取りも軽い。

僕はとりあえず町の中心部（歩いてすぐの距離だが）に向かうべく歩きだした。

すると…同じ船に乗っていただろう人々の中に、日本人の女性の姿を発見した。

声をかけるべきか否か…僕は彼女の姿を視界に入れながらも微妙な距離を保つ。

彼女が日本人であるか否か…それがイマイチわからなかったからだ（汗）。

海外で出会う東洋人は、本当にどこの国の人だかわからない…

『あ、日本人！』と思って声をかけたら韓国や中国の人だったり…中々見極めが難しいのだ。

同じ東洋人同士でもわからないのに、現地の海外の人から見たらものつとわからないだろう…と思う。

同じ事を彼女も考えていたのか…どちらからともなく暗黙の了解で、距離を詰めた僕達は笑顔で会釈する。

『日本人？』一番の疑問に彼女は頷いて答えると僕の隣に立ち、久しぶりであろう母国の言葉で話し出す。

『同じフェリー乗ってたよね？』

『うん…どこから来たの？』

『あたしはね…』

彼女の話によると、彼女は日本からスイスの農業大学に留学してい

る学生さんで、春休みを利用してスイスからドイツ、イタリア…と
言う風に下つてきたそうだ。

『どれくらいいるの?』

『とりあえずは3日くらいは居ようかと思って…』

『宿は…まだだよな?』

僕の問いかけに彼女が頷いたその時、現地の女性が僕達に声をかけ
てきた。

どうやら…港に到着した観光客を相手にする客引きみたいで、女性
は今夜の宿の事を聞いていた。

共に宿を決めない僕達は、さっそく値段交渉に入る。

オフシーズンのために観光客が少ないので、思っていたより安めの
値段の交渉から始まった。

『二人はカツプル?』

女性は僕達を交互に指差し微笑む。

僕達が慌てて首を振ると『じゃあ別々の部屋を…』と提案し、個別
に部屋の交渉を行うが、中々上手くまとまらない。

『二人部屋なら安くできるんだけど…』女性の申し出に、どちらか
らともなく『二人部屋ならいくら?』と聞いていた。

男女の間柄…よりも安さ…を重視してしまうのは、貧乏旅行者(失
礼)のさだめであるうか…(汗)。

結局、一軒の空き家を二人で借りると言う事で話はまとまった。

僕がとりあえず一日、彼女が3日と言う事になり…僕達は女性…エ
レナさんと共に車に乗り、宿へと向かった。

客引きのエレナさんはまだ20代半ばでスタイルが良く、とても色
が白く美しかった。

こんな映画に出てきそうな女性が、普通に宿屋にいるなんて…ヨー
ロッパって凄い所だな…

もろヨーロッパ…ラテン系の女性が不変の憧れの僕は、しばし彼女

の向日葵のような笑顔に見惚れていた。

エレナさんはとても明るく、道中の僕達に流暢な英語で話しかけてくれたが、お互いに半分も理解出来ず、曖昧な微笑みしか返せなかった。

エレナさんの車で数分かな…町の中心部から少し北側の家、それが僕達の宿だった。

密集する真っ白な建物達に囲まれ…小さな路地を見下ろすその家に案内された僕達はエレナさんにお金を渡すと一息つく。

二階建ての普通の家で、二階のベランダは広く…そこからすぐ向かいに見えるのは、小さな小学校だった。

お互いに荷物を片付けると、長旅の疲れをしばし癒す。

日本の女性…サカキさん名乗る女性は、どちらかというところガツシリしたタイプ（笑）の人で、一人でスイスに留学するくらいだから、結構しつかりした人である。でも、どことなく可愛らしい面もあったりして、僕と気が合う…最低限合わない人ではないと思った。

同じ日本人と言う恩恵もあって、すぐに色々な話に花を咲かせた。お互いの事、彼女のスイスでの生活、ここに来た経路…その他もろもろの他愛もない話。

どれくらい話したのか…時間の経過がわからなかったが、僕は街に出て散策をする事にし、まだ『用事があるから』と言う彼女を残して、ミコノスの町を歩く事にした。

日本とは色彩が全く異なる世界を一人歩く僕…眼に映るものすべてが新鮮で、歩いているだけでワクワクする、

足取りも軽く、真っ白な迷路のような街の中をしばらく歩くと、あの絵葉書で見た幻想的な風景の中に足を踏み入れている自分に気がついた…

三日目 P M ミコノスの猫と手料理

どこをどう歩いたのか、よく覚えていない…

後々にはこの島の迷路にも慣れて、迷う事無く自分の宿に帰れるようになるのだけど、この時はまだ右も左もおぼつかない状態だった。浜辺に近い飲食店が並んだ中心部の場所…島のマスコットのペリカンのペドロ君が、水揚げされた新鮮な魚を漁師のおじさんからもらい、そのおこぼれを数匹の猫が甘えた声でねだったりするのを見ながら、僕は白い迷路の中を探索する。

海伝いに真っ白な教会を見ながら歩いていくと、僕の前に大きな5台?の風車が現われた。ドンキホーテに出てくるような大きな風車は横一列に並んでおり、風車の向こうには真っ青なエーゲ海が見える。

『この風景はネットやガイドブックで見た事がある…』地球の歩き方等に乗っている名所の写真で言うのは、一番いいアングルで撮っているために、実際にその場所に行くと『何だ…こんな感じなのか…』と落胆する事が多い。

エジプトのピラミッドは、砂漠の真ん中にそびえ立っているように、実際にはそうでなかったり…数日前に訪れたパルテノン神殿なんかもその一つである。

ペルーのマチュピチュなどはその例外ではあるけど、大抵は興ざめしてしまう事が多い。

でも、この風景は写真の中の風景と変わらず、いやむしろそれよりも遙かに幻想的で美しかった。

自分が詩人になつた気分風車の周りの石垣を歩き、風車の隙間から見えるエーゲ海に目を癒す…そんな事を繰り返しながら、僕は風車の石垣で腰をおろす。

夕暮れが近づき黄金色になった原っぱを眺めていると、そこには…
いたいた、この島のもう一つの名物である猫が3匹ほど、僕を見て
いるではないか。

野良猫だからどうだろう…とと思っていると、そのうちの1匹が僕の方へ近づいてきた。

おいでおいでの手招きをすると、その猫は嬉しそうに僕の足元まで来て、すりすりをしてくれた。

まるで母猫に甘えるように、そのグレーの野良猫は僕の腕の中に飛び込むと、ゴロゴロと喉を鳴らす。

僕はその猫が愛おしくて、勝手にミロ君と名付けると、ずっとそのミロ君の頭や喉を撫でてやった。

他の二匹は近付く事無く、僕を遠くで見ているだけだったが…

ミロ君をさんざん触った後、僕は彼？に別れを告げると、宿へ帰るべく歩きだした。

明日この場所にきてもしミロ君がいたら、何かご飯でも持って行ってやろう…そう思いながら、再び迷路の中に足を踏み入れる。

そこから、出るわ出るわ…街の至る所に猫が出現して、それを相手にしながら、僕はこの迷路の中果たして『帰れるのだろうか…』と不安を抱えながら、気がつけば何とか宿に帰りつく事が出来た。

『おかえり』玄関を開けると、サカキさんが僕を迎えてくれていた。何か異国の地で日本人が迎えてくれるっているのは不思議な気分だな…

サカキさんは僕が持っている本を指差し『これ、借りてもいい？』と聞いてきたので、僕は何気に古本屋で買った『シルミド』を彼女に渡した。

旅に行く時は、なるべく普段自分が読まないであろう本を古本屋で買い持っていく。この時は『シルミド』とSAS（イギリスの特殊部隊）を扱った小説、あとは…

見習い魔道師とゴブリンの師匠の『魔法使いは〜』で始まるシリーズの一作目だったかな。

お互いに少し落ち着くと、僕達は一緒に晩御飯を食べる。宿が普通の家でキッチンがあつたので料理を作る事にした。

彼女がトマト、ソーセージ、ズッキーニ、僕がパンだったかな…お互いが勝ってきた食材を台所にある鍋を使って料理する。

生板の上で野菜を切り、それを鍋に入れて煮込んでいく…パスタのトマトソースを作る要領で、そこに塩を入れて味を整える。

『味見する？』サカキさんがスプーンを差出し、僕は言われるがままに鍋に中の料理の味見をした。

『ね、酸味が強いでしょ？』彼女が小さな笑顔で僕に同意を求める。確かに、日本のトマトより酸味が強かった。野菜や魚は朝一の船で運ばれ、それを彼女は買ったと言う事なのだが…（汗）。

その野菜を煮込んだ鍋にソーセージを切って入れ料理は完成…それを台所のテーブルに運び、二人の食事が始まった。

ソーセージは絶品で、トマトの酸味など忘れてしまいうくらい美味しかった。

決して豪華では無い食事をしながら、僕達はお互いの事を話した。

日本にいたら絶対に出会った無かった二人…でも、こうやって一つの部屋で共に夕食を食べていると、ふとここが、日本から何万キロも離れた異国の地である事を忘れてしまう…

部屋の窓に向こうにいあるのはギリシアの夜では無く、もっと身近な近所の夜なのでは…とさえ錯覚を起こす。

正直に言っ、とても心が安らいだ…僕は結婚というものをした事がないけど、こう言うものなのかな…みたいに感じたりもして、少し不思議な気分だった。

若かりし頃、当時付き合ってた人と同棲をしたけど…その時は若さゆえか毎日が喧嘩の連続だった…（笑）。

その人とは結婚を約束していたが、結局一年持たずに関係は破綻し別れてしまった。

その時は『もう誰とも暮らさない』と思っていたけど、それから数年が経ち、自身に何かの変化が訪れたのか…

こう言う生活だったら『いいかも』と思う自分がそこにいたりした。

三日目 PM〜四日目 AM 再会しよう！

ギリシアのお酒？』トマトソースのソーセイジをかぶりつつ、どちらからともなくそんな話題が上っていた。

ガイドブックの地球の歩き方で、ウゾと言うのがギリシアのお酒だと言う事を知っていた僕は『じゃあ、明日買ってくるから一緒に…』
と言い、再びサカキさんとの話を続けた。

彼女が留学しているスイスは物価が高い。普通のサラリーマンの手取りが日本円の40万円くらいとの事…

10年ほど前に自身がヨーロッパを訪れた時、スイスの登山鉄道に乗ってみたかったのだが物価が高い…と言う事前情報を得ていたので断念した記憶がある。

同じ理由でフランス、ドイツも滞在している期間が異様に短かった…(汗)。

ドイツではノイシュバインシュタイン城(よくカレンダーなんかに乗っている古城)、フランスではルーブル美術館と言った場所だけ訪れ、物価から逃げるようにスペインへの夜行列車に乗った(笑)。ルーブルの近くの売店でホットドッグが400円くらいしたかな…あと、地下鉄ではずっと二人組のスリに狙われていて、あまりいい記憶がない。

ルーブル美術館も広すぎて何を見ていいやら…モナリザとミロのピナスが想像以上に小さかったのがとても印象に残っているが。

公用語がスイス語とドイツ語が混同している国でホームステイ(おそらく)しているサカキさんは、友人のカップルと共にスイスから南下してきたとの事…

途中でそのカップルと別れ一人ギリシアに来て、次はギリシアかトルコに向かうと言っていたように記憶している。

日本にはあまり執着がないみたいで、卒業後もスイスで働きたいと

言いきっていた。

僕からすればその年代でそこまでの考えを持っているのはとても凄い事…だと思つと同時に羨ましかった。

30を超えた僕自身はまだ漠然としか、自分の進む方向がわかつていないのに（それも正しいかどうかも…）サカキさんは、もう自分の進むべき道が見えている…

当たり前だが…自分の本当にやりたい事を見つけるのは、人生の目的であり意味だと思つてる。

好きな仕事であつたり、理解しあえる恋人、友人、家族と過ごすことであつたり…

自分にとって大切な『何か』が見つけれれば本当の意味で人生が始まると思つし、早ければ早いほどチャンスをもに出来る確率は高いと思つ。

僕の場合…気が多い性格で、色々な事をやってみて結局どれも中途半端で結果が出ずに、やっとたどりついた自分の『本当にやりたい事』だつて全然ものになつていない（汗）。

そして今の仕事も、夢とは大きくかけ離れたもので…それ自体は嫌いな仕事ではなかつたが、自分がその仕事をあと10年続けている姿は想像できなかった。

大方人生の折り返し地点を過ぎている僕にとって、これから先に残された時間はどんどん少なくなつていのに…何をしているんだろつ。

心の中でそんな事を考えながら、僕とサカキさんはたくさんの事について話し合つた。

そして話が尽きるとサカキさんは「オヤスミ」の言葉を残して二階へ、僕は一階のベッドに身を沈め眠りについた。

朝起きるとその足で外へ出る。

宿の道を挟んだ向こうに見える小学校を左手に白い街並みを散策す

る。

通りを北に向かい、小さなマーケットに入ると店の中を物色する。日本と違い目新しいのは、レジの隣に焼きたてのパンがある事かな…香ばしい香りと安い値段に誘われるように、何個かパンを買おうとそれを手に宿に戻る。

サカキさんはまだ二階で寝ているみたいなので、一階のテーブルで一人でパンを食べ、何個かをテーブルの上に置き『食べてください』の書置きを残して再び宿を出る。

ミコノスも二日目となると多少は道を覚えているかな…と思ったがこれが全然（汗）。前にある道を歩いていると『いったい今どこを歩いているのか…』と言う錯覚に陥る…

とにかく海の方へ…と歩いていると、町の中心近くに別のマーケットと小さな公園を見つけ、そこでしばし足を休める。

その公園（ベンチ一つと小さな植え込み）にもネコがいて…人懐っこく僕の方へ近づいてくる。

シャープな三毛猫？のイメージのその猫はまだ子猫で、僕が喉を撫でてやると気持ち良さそうに喉を鳴らした。

僕はその子猫に『ミロ』と名付けると、隣のマーケットでツナ缶を買い御馳走した。

その姿を眺めながら僕は、いつになるかわからないけど自分がまたこの島を訪れた時、この子と再会できるかな…？と、ふと感傷的に考えたりしていた。

ベンチに座り朝の太陽を浴びながら、しばらくミロ君と戯れ…再び僕は歩き出した。

四日目 AM 幸せのペリカン

ネロ君と別れた後、僕はあてもなくミコノスの街中を歩き続けた。これと言って目的地は無かった。この白い迷路の中を歩いていると、自分が今どこにいるかわからなかったし、どこに向かっているのかもわからない。

どこにたどり着くのかわからない…次々に目に飛び込んくる風景そのものが新鮮で楽しかった。

感覚で海の方角を目指して街仲を南下していくと、小さなポート…浜辺にたどり着く。

ここはミコノスの中心部と、言ったらいいのか…小さな漁船、デロス島行きのボート、水揚げした野菜や魚をさばく場所、オーブンカフェ風のレストラン、旅行会社のオフィス、土産もの屋が並んでいた。

浜辺で魚をおろしている場所に行くと、そこには数匹の猫が、たったいまさばいた魚を漁師のおじさんからもらっていて、自分の取り分を貰った猫が素早くも物陰に隠れると、鮮度のいい朝食を楽しんでいた。

その隣にはこの島の名物である、ペリカンのペドロ君が、猫達と同じようにう魚をもらっていた。

意外とデカいペドロ君を恐る恐る触ってみると、結構いい感触…（笑）調子に乗って触り続けていると、いい加減向こうが嫌がってきて、最後はその大きなくちばしを振りかざし「向こうへ行け」の意思表示をされてしまう。

ペドロ君に追い払われた僕は、浜辺をぶらっと歩いてツーリストに行き、デロス島へのボートのチケットをする。

世界遺産に登録されているアポロン生誕の地は、この旅で行きたい

所の一つだった。

ペルシアとの戦いの後、ポリス同士の団結を固めようと結ばれたデロス同盟。アテネ全盛のその時代で、デロス島はかなり栄えたらしい。

アポロンが生まれたとされるその島では文化、貿易が栄えて、今自分がいるミコノス等はデロス島のおまけと言っか、穀物庫と言っか位置づけだったの事…

(デロス島はその後荒廃し、今では誰も住んでいない『遺跡だけの島…』になっちゃったが…)。

僕がツーリストデロス行きボートの時間をチェックすると、一日に何便か出ていいるようで、お昼からもあるらしい…と言っ情報を手に入れた僕は、ツーリストのお姉さんに笑顔でお礼を言っ店を出て、近くにあるスーパーマーケットに向かった。

そこで自分が飲んだ事のない未知のお酒『ウゾ』を手に入れると(1000円くらいか)、ひとまずは宿へ帰る事にした。

帰る途中、もうここに泊まろうと考えていた僕は、宿主であるエレナさんの自宅へもう一泊分の宿代を払に行こうとするが、道に迷い中々たどり着けない(汗)。

何とか見つけ出して、彼女のお母さんに宿代を手渡すと、それと同じくらい迷いながら何とか宿へ帰りつく。

宿に帰るとサカキさんが『パンありがとう』と笑顔で迎えてくれる。サカキさんも少しで歩いていたらしく少しの間、町中の情報を交換し合っ。

昼からデロス島へ行こうと思っっていた僕は、それまでの時間を読書に充てる事にした。

とりたててやる事のないサカキさんと、宿のテラスに上がり…彼女の洗濯物が干されている広いテラスで、各々読書に勤しんだ。

四日目 P M 次なる目的地は？

旅先で日本人と過ごしていると、そこが故郷から何万キロも離れた異国だという事を忘れてしまう。

サカキさんと午前の読書をする僕は、ふとそんなことを考えながらぼんやりとバルコニーから外を眺めていた。

向かいの小学校の校庭で様々な髪色をした子供達が遊んでいて、明らかに学年の違う子供達が仲良く笑顔を浮かべている。

僕達はしばらく本を無言で読み続けた後、それぞれの部屋に戻ると少し仮眠して、再び宿を出て町の中心部へと向かった。

旅行会社でデロス島行のチケットを買おうとしたら『今日は午前便だけです』と言われてしまった(汗)。

よく見るとオフィスズン(9月〜3月くらい)はボートの本数が少なく、今は午前中のみと言う事らしい…

仕方なくデロス行きを諦めると、忘れていたこの旅：ミコノスの次に行くべく場所について真剣に考える事にした。

僕の旅は…例外なくいつも『行き当たりばったり』である。

計画性の無さ…と言うわけでは無いのだが、どうも筋書きのないドラマを求めがちで(笑)、この時点ではまだ次にどこに行くか全く考えていなかった。

船があればサントリーにだけど、オフィスズのせいでサントリー行きの船は無いと聞いていたので、トルコに渡るかアテネに戻ってメテオラの方に行くか。

…でも、トルコは日程的に厳しそう(残り3日)なので、やはりアテネに戻る事になるのか。

そんな事を考えながら町はずれのツーリストに行くと、そこで感じ

のいいおじさんから『明日ならサントリーニの船がある』と教えられる。

僕は迷いなくサントリーニ行きの手ケットを買った。

半ば諦めていたサントリーニへの活路が開けたことで嬉しくなった。この度の大方のルートが決まったので、あと一日滞在を延ばさなければいけなかったが：僕自身、このミコノスがとても気に入っていたので、かえって良かった。

それに一日延ばせばデロス島へも行けるし：これ以上の良いプランニングは無い（笑）。

全てが上手くいった満足感でツーリストから出ると、僕は再び町を歩き回りお土産を探す事にした。

何とか迷子になる確率が減ったものの、やはりこの町は迷路である

…（汗）。

町の中心部へ出ようと四苦八苦しした揚句、一軒の石鹸屋さんを見つけて入る。

恰幅のいいお爺さんと大きなシェパード？が僕を出迎えてくれて、お爺さんお勧めのオリーブ石鹸をいくつか買っと、少したどたどしい英語で会話したのちに店を出て、宿へと戻った。

宿へ帰るとサカキさんにもう一日滞在する事を伝える。

どうやらサカキさんは予定を早め明日出発を考えていたみたいで『あたしと交代』という事で話が決まり、あと一泊の宿代をサカキさんに渡す。

四日目 P M S h a l l I W e アヴァンチュール!?

ミコノス宿泊を決めた僕は、その足で宿主であるエレナさんの家に行くと、彼女の母さんらしき人にその事を伝える。

『問題なし』おばさんはそう笑顔で答えると、再び宿に戻り夕食を取った。

今夜も宿のキッチンで自炊である。昨夜と同じようにトマトを煮込んだ料理と、あと僕が買ってきたウゾが食卓に並ぶ。

生まれて初めて飲むギリシアのお酒：瓶からコップに注いで飲んでみる。

異国のお酒は期待を裏切らず未体験の味であった。それが美味しいかどうかは別のお話として…(汗)

「あたしは駄目…」

サカキさんが甘ったるいお酒にギブアップすると、僕一人チビチビとお酒を口にするが、度数が強いのでせいかあまり減らない。

結局半分も開けないまま、ウゾはそれ以降の旅のお供として、リュックに入れ持ち歩く事にした(ドラムカーですな)。

最後の晚餐(笑)を取った僕とサカキさんは、どちらともなく『外を散歩しに行こう』と言いだし、まだ少し肌寒い夜のミコノスタウンを歩く事にした。

彼女の名誉のために先に言うと、ここから先の描写は、かなり僕自身の主観で書いたものですので、モテない男の妄想だと思って聞き流してくださいと幸いです(笑)。

お互いに明日はそれぞれ別の人生に向かって歩き出す。

なので明日が訪れて『さよなら』を言うと、おそらくもう一生会う事が無いだろうし、たとえあったとしても、ミコノスで過ごした不

思議な関係にはなりえないだろう。

それがお互いにわかっているのか、夜の街を歩く僕達はとても親密……腕こそ組まなかったが、カップルのような感じで迷路の中を歩き、目にした土産物屋で時間を過ごした。

浜辺から海を眺め、幻想的な街並みを歩き疲れると、そのまま宿の前まで帰る。

鍵を開けて中に入ろうかと言う時に、ふと彼女が階段の所で腰をおろし夜空を見上げた。

「きれいなね」

全てにおいて日本とは違う星空に感嘆の吐息をつく、少しの間夜空に視線を釘づけにしていた。

僕も彼女の隣に腰を下ろすと、同じように夜空を眺めた。

そこから星を眺めながら少し会話した。

会話の内容はほとんど覚えてない。いや、正確に言うなら会話が途切れる事で、二人の間に何とも言えない沈黙が訪れるのが怖くて、無理やりに何かを言葉にしていたのかもしれない。

言葉の会話の向こう側で、声にならない感情が僕の中に（あるいは彼女も？）沸き起こり、会話なんかどうでもよくなってしまう（汗）。

僕は彼女の肩に手をまわし、そつと抱き寄せたい衝動に駆られていた。

もしかたえそうだったとしても、きっと彼女は拒まないだろうと、僕は思った。

いや、むしろ彼女自身がそういう展開になる事を望んでいるとさえも……

海外の旅先で出会った日本人同士は、日本人と言う共通点で結構親密になれたりもする。

そういつた今までの経験とはまた違った、不思議な感覚だった。自分の容姿やキャラなど度外視すれば、まるで映画のワンシーンみたいだな…と話も上の空でそんな事を思う。

さて、どうする…

このまま肩を抱き寄せるか、それとも……

恋愛に関してのスキル不足を否めない僕は、タイミングを図れないままうわべだけの会話を続ける。

そして次に取った僕の行動で、意外なほどあっさり物語は終わった。

内心の緊張を隠すために僕はおどけたように言った。

「このままここにいたら、僕は違うモードに入ってしまうかも」

もう既にそのモードに入っているのだが、あえて茶化すように言うて見せた。

その一言でふと幕が下りたように彼女が腰を上げると、僕に背中を向けた。

「そろそろ帰ろっか」

煮え切らない僕に痺れを切らしたのか、それとも彼女自身も冷静になったのだろうか…

熱が冷めたみたいいつもの笑顔になると『おやすみ』を言い残して、階段（彼女の部屋）を登って行った。

彼女の背中を見送る僕は、ほっと安心したような…なんだか心に忘れ物してしまったような気分になり、釈然としないままベッドに倒れ込むと、そのまま眠れぬ夜を過ごす事になった。

でも、実はここからもう一つのドラマがあつて…

それから何時間かして、夢うつつの中でふと二階の扉があき、サカキさんが階段を下りてきたのだ。

サカキさんは階段を降り切ると、寝息を立てている（フリをしている）隣を通り、キッチンの隣にあるトイレに向かった（そう言えば

トイレ一家にしかかった)。

サカキさんが用を済ませ再び階段を上がる。目を閉じたまま彼女のたてる音だけ聞いていた僕の耳に、階段を上っていくサカキさんの足音が聞こえる。

階段を登り切ってドアを開けて、すぐに閉めると、今までの妄想を全て打ち崩すような音が耳に飛び込んだ。

『ガチャリ!』

扉の鍵を閉める無情な音…

侵入者を防ぐための鍵だけど、この場合の侵入者って『俺』の事? ガチャリってオイ…僕は込み上げる笑いを堪えながら、心の中でツツコミを入れていた。

寝耳に水とはこういう事…そんな事をしなくても、僕は『そんな事』しないよ! いや、しないハズ(汗)。

今まで抱いていたのは、僕の一人相撲の妄想だったのか、なんだったのか…(涙)

まるでコメディ映画のようなオチというか、結末におかしくなつて、僕はベッドの中でもう一度呟いた。

「ガチャリってオイ」

五日目 AM 〱ゼウスが浮気相手に子供を産ませた島〱

安物の青春映画並みに僕は眠れぬ夜を過ごした。

まあ、色々あったけどサカキさんとは今日が最後、彼女がピレウスに帰る船に乗ってしまったえばもう二度と合う事は無い…と思う。

良くも悪くもこれが『旅』であり、彼女自身もこれまでの旅先で出会った人達と同じく思い出の人となる。

旅に行くとは例外なく日本人と出会い、その人達と一瞬の同じ時間を共有し、またそれぞれの人生へ戻っていくという事に慣れっこになっているが、別れる時はやはり寂しいものがあり、これだけはこれから先も慣れる事は無いだろう。

朝起きると、何事も無かったように笑顔で挨拶を交わす僕と彼女。

朝食を食べ、これからデロス島に行く事を伝える。

デロス島へは朝一で行き、お昼ごろには帰る予定なので、彼女がここを発つ船の時間には間に合うはずだ。

『またあとで見送り行くよ』と言い残すと僕は宿を出て、浜辺にある船着き場へと向かった。

船着き場でチケットを買い船に乗り込む。

船は2〜30人ほどが乗れるであろう大きさだが、今デッキにいるのは僕とあと、白人の親子くらいだった。

お父さんと娘さんらしき人物は二人ともサングラスをかけ、談笑を交えながら2Fデッキから海を眺めていた。

話は飛ぶけど…白人の人つてどうも紫外線に弱いというか、太陽の感じ方（見え方）が違うみたいです。

僕たち日本人より太陽が眩しく見えるのか、旅先で見た白人系の人、晴れの日はほぼ例外なくサングラスをかけています。

『そんな眩しくもないだろう』と言う感じでも、彼らには耐えられない眩しさのようです。

あと、体感温度も違うみたいで、僕らがお風呂に入る時の温度（例えば40度前後）くらいでも、まるで50度くらいのお湯につかるような険しい形相で入っています。

以前ペルーのチバイと言う所の温泉プールに入っている時、後から来た白人のおじさん、死にそうな顔でプールに入っていました（たぶん38度くらいぬるま湯）。

『そんなに熱くないだろう』と言う感じでも、彼らには耐えられない熱さのようです。

出発時間が来て来て、船はアポロンとアルテミスが生まれた場所、デロス島へと向かった。

紀元前480年前後、ペルシアとの戦いで勝利したギリシアは、ポリス諸国を集めてこのデロス島で同盟を結んだ。

その後中心となったアテネが勢力をどんどん増して、他のポリスを制圧し始め、その辺りから少しづつエーゲ海の文明が綻び始めるのだが、その話はまた機会がある時にでも…

遠ざかるミコノス島の景色はとても美しかった。

エメラルドの中に浮かぶ白い建物：美しい絵画の一枚を見ているようで、眼に映った風景がそのままの状態で記録される事は無いと知りながらも、僕はカメラのシャッターを切っていた。

デロス島までは約20分ほど…外のデッキにいる僕は肌寒くなったので、船の中に入りソファに腰掛ける。

少し眠気に襲われながらも船窓の外を眺めっていると、船の進む先に茶色（岩肌ですね）の島が見えてきた。

船の速度が落ちている事でそれがデロス島だと悟った僕は、再び船の外へ出て、デッキからその島の姿を一望した。

五日目 AM もの言わぬ遺跡に咲くのは…

世界遺産、デロス島の船着き場に船が付くと、僕はその一步を踏み出した。

お客さんの数も数えるほどで、各自船着き場から移籍乗る場所へと散らばって行った。

次に船が迎えに来るのが2時間後：島の広さから言って、全部回り切るのにそう時間はかからないだろう。

僕は船着き場から広い遺跡跡に足を進める。

まずは島のシンボルでもある8体のライオンの像を抜けて、もっとも広い遺跡跡へ向かう。

遠い過去に貿易の主流として栄えたデロス島の街並みであったが今はその面影は全くなく、広大な敷地とそこにあるギリシア風の石の柱、家の基礎が見渡す限りに続いていた。

通りを歩きながら目を閉じると、僕は遠い昔に貿易の中心地として賑わった街並み、そこで暮らす人々の事を想像していた。

イタリア、エジプトと言った様々な国の船が毎日のように訪れ、オリブやワインといった名産物を売り買い、肌の色や言葉の違う人々が通りを行きかい声を張り上げる…そんな光景を思い浮かべながら僕は通りの中を歩いていた。どんな文明にも終りがあり、栄えた国や街も永遠では無い…

今までに見てきたイタリアのポンペイ、ペルーのマチュピチュと言った、かつて栄えた遺跡跡を見た時に感じた切ない思いを抱きながら歩いていると、道端に咲く色鮮やかな花達が目に入る。

文明の灯消え、人々も消え生命の通わない街並みに咲く花：主のい

なくなった場所を守るように、その花達は精いっぱい命の輝きに満ちていた。

今は生命の通わない街並みと、今を一生懸命に生きている花達のコントラストと言うか…そう言うものがとても美しく思え、僕はエーゲ海の太陽を浴び鮮やかに色づく花達の写真を何枚も撮り続けた。

アポロンの像の跡を抜け敷地を出ると、僕はこの島の一番高い場所…キントス山を登り始めた。

観光の順路がそうなっていたせいか、僕は迷いもなく石段を昇りキントス山を頂上を目指すのが、これが想像（見た目）より距離があった、途中で何度か挫折しそうになる（汗）。

登っても登っても新たな道が出てきて、その度に『引き返そうか…』と躊躇するが、息を切らしながら何とか頂上まで辿り着くと…言葉に出来ないくらいの絶景が僕を待っていた。

頂上からは島の全てが一望する事が出来、その向こうには終わる事の無いエメラルドの海…とても美しく広大で、今にもかつての人々を乗せた船がやってくるのでは…と思うほどだった。

山を登り切った達成感も重なってか、僕は少しの間言葉無くしたようにその景色を見下ろすと『かつてこの島に住んでいた人達も、同じ景色を見ていたのかな…』と、そんな事を考えていた。

『この景色を忘れない…』いや、いつかこの街に住んでいた人々の物語を書いてみたい…と、小説家の真似ごとをしている僕は心に誓うと、来た時の道を通って下山した。

山を降り切ると道が二股に分かれていて、僕は通っていない方に進路を取って船着き場へ向かった。

僕が通った道はどうやら、かつての人々の住居の集まりみたいな所で、崩れ落ちた小さな家の敷地が続いていた。

船の出発時間にまだ余裕があったので、やや狭苦しい（汗）通りを歩きまわり、何度も道に迷いながら船着き場に戻ると、ギリシア語で『輝き』を意味する島に別れを告げ、ミコノスに戻る船に乗り込んだ。

五日目 P M そして僕はひとりになった

お昼過ぎに予定通りデロス島からミコノスへ帰った僕は、宿に戻りサカキさんと再会する。

サカキさんはひととおりの支度を済ませて、来た時と同じように大きなリュックを背負っていた。

彼女の行く先はピレウス…たしかギリシアからまた北に上がって、スイスに戻るんだっけ。

「じゃあ、あたしはいくから」

「港まで見送るよ」

どことなく気まずい…昨夜からの変な空気の中、僕とサカキさんは宿を出ると、言葉少なげに港までの道を歩いた。

何か気の利いた事を言おうとすればするほど僕の口の中は渴き、思うように言葉にする事が出来なかった。それは彼女も同じなのだろうか…

お互いの存在を、過ぎ去った思い出の人にするための道のりを歩き、港にたどり着いた

僕とサカキさんは、そこで大きく手を振って別れた。

「じゃあね」

「じゃあ」

僕に笑顔を残して背中を向けたサカキさんが、港に見える船に向かって歩いて行く。

リュックを背負って小さくなっていく彼女の後姿を眺めながら、どうしてハグのひとつも交わさなかったんだろう…？ と少しの後悔をしていた。

でも、その反面…少しホツとしていた。

これでまた仕切り直しと言うか、新しい旅が始まるのだ。

別れと出会い繰り返すのが旅であり、その延長線上にあるのが人生なのだと僕は思う。

とまあ、そんな詩的な感傷に浸りながらも、僕はまったくま逆の行動を取るべく港に背を向け歩きだした。

彼女もいなくなったので、ちょっとハメを外してみようと考えていたのだ。

ぶっちゃけて言うと、それほど高い値段でなければ、女の子を買いに行こうと思っていた。それほど深い理由があるわけでもなく、ただ自然とそうしてもいいな…と思った僕は、ふらっと外を歩いて、それらしい場所を探し始めた。

もちろん昼間だからそんな事をするつもりではない。

そういう女の子が出現するのは夜になってからだし、本当に女の子を買うのかどうかもまだわからなかった。

ただ、そう言うモチベーションで街を散策していると、街並みの風景がちよつと違って見えたり、自分が世界征服でも企んでいるような「悪人」感が味わえたりするので、もしかしたら、そう言う気分になりたかったのかもしれない。

これまでに訪れた国で、何度かそう言う「悪人？」の行いをしてきた僕は、自然と街のどのあたりに行けば、そういう場所があるか…多少ではあるが嗅覚が利くようになっていた（もちろん上には上がいて、よくこんな場所見つけるなあ…と感心を通り越して感動をも覚えるプロフェッショナルもいるのだけど）。

僕は探偵のように、路地裏の日の当たらない場所を選んで街中を歩いた。

リトル・ベニスと呼ばれる海沿いの路地を歩いていると、狭い路地の階段（段差）に黒人が座っていて、僕に微笑みかけていた。

白いセーラー服（みたいな？）を着た彼は25歳くらいだろうか…（どこかのレストランの店員かな）彼は、僕が立ち止まると、けっ

こう流暢な英語で話しかけてきた。例の如く英語が未熟な僕は、愛想笑いと頷きでやり過ごしながら話を合わせた後、思いきって彼に「女の子」が買える場所があるかを聞いてみた。

彼にはどことなく不良（笑）と言うか、チヨイ悪的な人懐っこさがあり、『この島のことならなんでも聞いてくれ』オーラがあるような気がしたのだ。

「いるよ、そういう女の子はいっぱい。でも、今はまだオフシーズンだし、それにどちらかと言うとゲイの方がはるかに多い。まあ、夜になったら探してみるのもいいさ」

まあ、だいたいこんな感じで彼が説明をしてくれた。

探せばいるだろうな：大体の手ごたえを掴んだ僕は、その後少し彼と話をして笑い合つと、大きく手を振って彼に別れを告げた。

それから海伝いに宿の方まで戻り、宿の周りを散策してアイスクリーム屋さんでアイスクリームを買って、歩きながら食べた。

サカキさんが去って一人で街を歩いていると、本当にオフシーズンであることを実感した。

店の多くのドアは閉ざされ、シーズン開幕に向けて改装やペンキ塗りをしている店もちらほらとあった。

アイスクリームを食べ終わって、することもなく宿に帰る。

ドアを開けがらんと静まり返った部屋の中に入ると、そこで初めて一人になった実感というか寂しさが込み上げてきた。

その昔、一緒に住んでいた女の子が全ての荷物と一緒に部屋から出て行った時、こんな感じだったっけ…

重くよんだ空気の中、僕はリュックからウゾを取り出し一口飲んだ。

身体にアルコールが沁み込むとともに、ふいに疲労感というか眠気

が襲ってきた。

一日中紫外線を浴びているせいか、時差ボケか…僕はそのまま「昼寝」とばかりにベッドに倒れ込んだ。

夜になったら起きて「女の子」を探しに行こう！ と、そのまま眠りにつくと、次に目を覚ましたのが完全に夜であった。

おそらく8時から9時くらいだろうか…寝る前は結構夜に弾けようとモチベーションが上がっていたけど、その時はとにかく眠くって、なにもする気が起きなかった。

結局僕はベッドから一度も出ることなく、朝まで眠りについてしまった。

六日目 AM 心の帰る場所

夜中に何度か目を覚ましたみたいだけど、あまり記憶が無い。
ミコノス最後の夜、いや一日をほぼ睡眠に費やしてしまった僕は、
朝の光で目を覚ます。

静まり返った部屋で時計を見ると、8時か9時くらいだっただろう
か：僕は起きると、リュックの中に入れてあったパンをかじった。
何だかとてももったいない時間の過ごし方をしてしまったなあ、と
反省しつつ身なりを整えると、ふらつと外の空気を吸いに出た。
青い空の下、まだ人通りの少ない路地を歩くと、マーケットの近く
に住んでいるネロ君のところへ向かう。
マーケットの前の公園のところにネロ君がいたので、僕は店で缶詰
を買ってネロ君のところへ近づいた。

ネロ君は僕に気がつくと、ゆっくりとひと伸びしてから頬をすり寄
せてくる。

「今日でお別れだからね。元気にたくましくやっていくんだよ」
僕はネロ君の頭を撫でながらそう言い聞かすと、缶詰を開けて差し
出した。

猫は嬉しげにひと鳴きすると、缶詰にむしゃぶりついた。

その豪快な食べっぷりを微笑ましく眺めながら、ふと僕は：またこ
こに戻ってくることを考えていた。

いつになるのか：そんなことは全く考えていなかったけど、そんな
予感みたいなものが僕の心に中に湧き上がる。

「その時には、また会えるよね」

僕は食事中のネロ君の頭を撫でながらそう呟くと、彼の邪魔をしな
いように、フェードアウトするように宿へと戻った。

いつになってもいいから、またこの地に来よう。
その感情は、今まで訪れた国や土地に感じていたものと、全く違う

ものだった。

これまでに訪れたピラミッドやマチュピチュ、サンピエトロ寺院は偉大であり壮大であり、その時代を生きた人々の考えや力が見える場所であった。

そこにもう一度訪れたいと言う思いは、また何かしらの新しい刺激を受けたい…という目的であったが、このミコノスにはそんなものは無く、ただ純粋にそこに身を置きたい…というものだった。

自分の人生観を変える光景や、新しい導きではなく、純粋に心が帰る『故郷』みたいなものかな。

異国の地で故郷というのは、少し変な話だけど…そう表現するのが一番近いと思う。

これから先の人生で、色んなことがあり、いろんな経験をするだろうけど…最後にはここに帰ってきて、自分の歩んできた人生をぼんやりと振り返りたい。

僕自身、まだ数えるほどしか異国の地を踏みしめていないけど…ここはきつと僕が求めていた『自分が一番好きな自分でいられる場所』なのだろう。

心の中で再びこの島を訪れると誓うと、僕は再び重いリュックを担ぐ。

3日間泊まった宿と、サカキさんとの微かに甘い？思い出と、陽気なエレナさんに別れを告げると、僕はリュックからウゾを取り出し、乾杯とばかりに口をつけた。

「やっぱ美味しくないな」

捨てるのももつたいないので…はやくこのお酒を空にして、リュックを軽くしよう。

僕は宿を出て路地を歩くと、見納めとばかりに真っ白な街並みを名残惜しそうに…目に焼き付けるように眺めながら、すれ違う人一人一人に、心の中で手を振りながら港へ向かった。

次の目的地はサントリーニ島。エーゲ海でもっとも有名で壮大な景色が見れる場所だ。

でも、オフシーズンの船の都合で僕に乗る船は直接サントリーニ行くのではなく、シロス島う名前も聞いたことの無い島に行くのと。

しかも、そのシロス島で6時間も次の船を待たなければいけない…
(汗)。

何度か海外に旅を重ねたお陰で、待つ事にはすっかり慣れていたが… 6時間にはちょっとうんざりする。

何をして時間をつぶすか？ ここ(ミコノス)と違って、きっと観光的なものは何もない島だろうし…

そんなことを考えているうちに港についた僕は、そこで待っていたフェリーに乗り込んだ。

六日目 PM シロス島でシエスタ？

フェリーに乗り込んだ僕は、荷物を荷物庫（セキリユティ皆無）に置き身軽になるとデッキに出て、この旅最大の貴重な時間をくれたミコノスに別れを告げにいった。

初めてこの島に来た時と同じように真っ白で美しく、何度見ても溜息しか出てこない。

デッキの手すりに手を付いて、別れを惜しむようにその風景を眺めていると静かに船は動き出した。

サカキさんから遅れること一日：新しい地に向かう僕を載せたフェリーはどんとその美しい島から遠ざかり、やがてエメラルドの海水線の向こうへ消えていった。

僕はフェリーの喫茶フロア（ここが2等自由席）に行ってソファに腰を下ろすと、シロスにつくまでの1時間ほどを読書に費やした。

ミコノスから離れたことで、僕はようやくこの旅の終わりを意識し始める。

これまでもそうだったように旅にはいつも起承転結があり、転の部分ではいつもその旅のキーワードとなるような心に残る出来事が起こる。

ペルーを訪れたときは、高地と過酷な日程、水しか出ないシャワーで見事に風邪をひき、それが治らずに心身ともに疲れ果てて旅が嫌になりかけた時に訪れたボリビア…

眩しい太陽と陽気な人達がとても心地良く、それまでの疲れを一気に吹き飛ばし旅が楽しくなり、終わりに向かって心地のいいテンションを保つことができた。

今回はミコノスで同じことが起こり…過酷な旅から、ようやく本当の自分の旅をしているという実感が持てるようになった。

あとはこの充実した気持ちのまままで旅を終えよう、と心の中で思

うと当時に、旅の終わりを意識しはじめたことで少し寂しい気分になった。

あと数日でまた仕事と日常が戻ってくる…退屈とストレスしかない日常が（笑）。

そんなことを考えながらウゾに口をつけていると、船が減速をしはじめる。

シロス島に到着したことを身体で感じ取ると、少ししてからアナウンズで到着の知らせを聞く。

僕は喫茶ルームからタラップを降り、荷物庫からリュックを引き上げると船のゲートが下りるのを待った。

間もなくゲートが開き、僕はシロス島への一步を踏み出した。ミノノスと違って観光地では無いでせいか客引きも寄ってこず…故に僕はどこへ向かうか途方に暮れた。

港に出でとりあえず街の中心部に向かう。何はともあれ、ここからの6時間…リュックを担いで動き回るわけにはいかない。まずはこのリュックを預けられる場所…と思って町中を歩いていると、僕を乗せるきたフェリー会社のオフィスを発見。

そこでリュックを預かってもらう交渉をしたら、快くOKを貰ったので、僕はリュックを置き身軽になる。

さて…どうしよう。

オフィスを出た僕はふらつと街を歩いてみるが、マーケット、カフェ、お土産を売っている店…これと言って立ち止まるうと思つ場所が無かった。

とその時、開店前の雑貨屋の前にイスが置いてあって、その上に二匹の猫がちょこんと座っていた。

茶色の縞模様と黒…狭い椅子の上に肩を寄せ合うようにして座っている猫に近づくと、僕は躊躇いもなく彼達に触れていた。

猫は人慣れしていて、すぐに僕の手を頬を摺り寄せてきて甘えるよ

うに微笑みかけてくれた。

絵葉書になりそうな二匹の猫を何枚か写真に撮り、しばらくその猫を触って時間を潰した僕は、彼達に別れを告げると街の中心部に進路をとる。

街の中心部にはカテドラル（教会）があるらしいから、とりあえずはそこに行ってみよう。

ちなみに腕時計を見ると、まだ到着してから一時間も経ってなかった：

商店街を抜け街の中心部への通路を抜けると、教会にたどり着く。ヨーロッパなんかで良く見る街のパターンとして、街の中心部に大きなスクエアを設けて、そこに教会を建てる。

過去に訪れたスペインやペルーなんかでも大抵このパターンで、スクエアは大抵公園になっており、そこで家族連れや日本人（旅行者）を騙そうという（笑）人達で賑わっている。

幸いにも人はまばらだったので、僕はスクエアの石段のひとつに腰かけると、ぼんやりと教会を眺めていた。

六日目 P M 時は金なり・・・

日本ではおそらく見る事ができないだろう真つ青な空と眩しい太陽の下、僕は石段に座りぼんやりと教会を眺めていた。

教会のそばでは、小さな女の子達が何か楽しそうに話をしている。その風景がとても自然に日常の中に溶け込んでるように見えた。ギリシア人にとっての信仰はキリスト教の改訂版？であるギリシア正教がほぼ全てである（…と思う）。

ミコノスやサントリーニにある鮮やかな青い屋根の教会がギリシア正教のそれで、教会はミコノス島だけでも百を超える数があるらしい。

馬小屋みたいに小さな教会も含めての話ではあるが…

これまでにいくつかのキリスト教の国を訪れ、そこで感じたことは、僕達日本人が想像出来ないほど信仰が生活に深く根づいていると言うことである。

僕は日本に生まれ、殆どの人がそうであるように、特定の宗教を信仰すること無く育ってきた。

正月に初詣で手を合わせることはあっても、それは単なる儀式のひとつであって神様を信じているわけではない。

どちらかというと宗教には胡散臭いものを感じている。神様はいないと思っっているし、神様を信じている人は心の弱い人なのだと思うている。

実際に日本では、そう言う心の弱い人達に漬け込む悪い宗教団体も存在するのも事実である。

だから日本で宗教をしている人を見ると、どこことなく馬鹿にした目で見ていた自分がいた。そんなものを信じるなら、もっと自分のことを信じる…と。

僕自身の考え方としては、神様の正体っていうのは、自分の中に存在するものだと思っている。

最大限に活性化された脳が自分にもたらす最良の選択や導きが、神の正体なのだと。

信仰を通して脳を活性化させるのも、とことんまで自分を追い詰め脳を活性化させるのも、結果的には同じなのだ、と僕は思う。

ただ、両社ともに大切なのは、神様であれ自分自身であれ強く『信じること』である。

信じること、諦めないことよってによって脳は自然と自分に最適な答えを教えてくれるのだと。

だったら、僕は何かに頼るよりも自分自身でその答えを見つけない。誰かに答えを求めるなら、自分自身の中に答えを求めようと…いや、正確に言うならば、その答えを求めるために、こつこつと旅をしているのかもしれない。

日本の悪い宗教？ のせいか、そういう概念が出来上がっている僕であったが、ここギリシア…他のヨーロッパ諸国で見る人々の宗教観は、そういうものとは少し違って見えた。

水や空気のように、自然とそこにあるものと言ったらいいのか…とても生活や日常の中に溶け込んでいて違和感が全く感じられなかった。

当たり前のように神様を信じ、当たり前のように教会に足を運ぶ…それが生活の一部であるかのように。

教会も当たり前のように街の中心部に建てられ、それを中心に街が栄えていく…彼らにとって信仰は、生きていく上で必要な『太陽』みたいな純粹な存在なのだろうか。

小さな子供達の笑顔を見ながらそんなことを考え、僕はしばらくその教会のそばで行き来する人を眺めていたが、太陽の日差しが強くなってきたので腰をあげ、再び町の中へと足を踏み入れた。

通りにある店先にいる、ふくよかな猫としばし遊び、再び港の方までやってくると、僕はなるべく流行ってなさそうなカフェを探す。もうこの島で歩きまわって時間をつぶすのは無理だ…というより、歩くことに疲れた。もう一歩もあてもなく動きたくない。

なら、船が出るあと4時間余りをカフェに立てこもり、読書でもして過ごそうではないか。

日差しも防げるし寝たけりや眠れるし…でも、そうならなるべく静かで、居座っていても迷惑がかからない店にしなければ…

というわけで、僕は港のそばにある薄暗い、お客さんで賑わっていないカフェ（笑）に目をつけ、そこに入った。

なるべく切り詰めた旅なので、豪華に昼食というわけにはいかない。僕はメニューの中で一番安いコーヒーを注文すると、そそくさ店員の目の届かない一番奥の席にこっそりと座った。

店員もあまり関心が無いのか、この手の客が多いのか…コーヒーを持ってきた女性が、僕が本を片手に無言のアピールをしているのを見ると、了解とばかりにコーヒーをテーブルに置き、黙って去っていった。

でもまさか、夕方までの時間をつぶすとは思ってないだろうな…そんなことを考えながら僕は温かいコーヒーに口をつけ、ほっと一息つくくと、リュックに残っているパンを取り出しかじりついた。

カフェの奥に陣取った僕は、たった一杯のコーヒーで買い取った自分の領域で、とても申し訳ない気持ちをいっぱいに…それから何時間もかけて一冊の本を読んだ。

本を読み終えると、船が出る夕方6時が近づいていたので、僕は最大の感謝の笑みというか複雑な表情を女性の店員に向け店を出た。船会社のオフィスでリュックを受け取ると、僕はようやく港に現れたサントリー二行きの船に乗り込んだ。

旅をしていると、何で無いこともすべて意味のあることだと思える

のだけど…さすがにこのシロス島は、何も印象に残る事が無かった（汗）。

印象が残ったのは、椅子の上で僕と遊んでくれた二匹の猫くらいだろうか。とても可愛くって愛嬌があったなあ。

まあでも、こんなことが無ければ間違いなくこの島を訪れることは無かったわけで…そういう意味では旅の見聞が広がったというところでしょう。

夕刻で少しづつ太陽が黄昏の光を帯び始める海をデッキから眺めながら、僕はシロス島に別れをつける。

そして、この旅の最後を締めくくるに相応しい場所であろうサントリニ島へと向かった。

六日目 P M 伝説の島

サントリーニ島で連想することは、アトランティス大陸の伝説だった。

一万二千年も前に存在したとされる幻の文明で、当時では考えられないような発達した科学で栄華を極め、果てには神やアテネに戦いを挑み、最後にはゼウスの怒りを買って、一晩のうちに海の底に沈められたという。

古代ギリシアの哲学者プラトンの『クリティアス』に記された伝説のアトランティス大陸だが、それが実在したかどうかは近年の科学で次第に明らかになってきていて、結果的には存在を証明するのは難しいとのこと。

紀元前千五百年頃、ミノア文明時に起こったサントリーニ島の火山噴火のことをモチーフにしているのでは？ というのが有力な説の一つで、僕自身もそうではないかと思っている。

現にサントリーニからはかなりの数の遺跡や壁画が発見されており、そこに文明が栄えたことは歴史的にも証明されており、そこに尾ひれがついて壮大な話になったのでは？ と僕は考える。

実際に『クリティアス』に登場するアトランティス大陸もエジプトの神官から聞いた又聞き之又聞きで、かなり信憑性にかけるみたいだし（笑）。

フェリー乗りながら僕は、ぼうつとそんなことを考えていた。

旅の最終目的地のサントリーニ島ではあるが、僕の旅はミコノスでほぼ終わっていた（得るものがあつた）ので、あとはおまけみたいなものかな。

夜も更けて眠くなってきた頃にフェリーの速度が落ちる。

アナウンスでまもなく到着を告げると、僕は島に着いてからの心の準備をしていた。夜遅くに島について、はたして宿を確保できるだろうか？ それが一番の不安なことであった。もし港について宿が見つからなかったら、どうやって過ごせばいいのか？ 野宿？

無計画な旅をモットーとする僕にとって、これは切実な問題であった。

まあでも、港につけばきつと客引きはいるだろう、いや、いてくれなければ困る…非常に。

そんな杞憂をよそに船は港にたどり着く。

暗くてよく見えなかったが港自体はとて小さかった。こじんまりとした港の建物を背に、とてつもなく高い絶壁が大きな影のようにそびえ立っていた。火山の爆発で島の大部分が吹き飛んだ生々しい傷痕である。

それを見上げながらフェリーのゲートから出ると、港にはまばらではあるが、客引きらしい人達が待ち構えていた。僕はほつと胸を下ろすと、その中の一人のおじさんに近づき交渉を始めた。買い手と売り手のバランス…オフシーズンはとにかく観光客が少ないので、結構こつち（買い手）の我儘が通る。僕はあたかも旅行慣れしているキャラを自らに憑依させると、おじさんに堂々と「20ユーロ、OK?」と迫る。おじさんは一瞬苦虫を噛み潰したように顔を歪めて一呼吸置いたのち、しぶしぶと「OK」と首を縦に振った。

「仕方ない、宿を空っぽにするよりはマシだ…」おじさんの顔がそう物語っているようであった。

交渉成立…満足げにおじさんに笑みを浮かべると、僕はおじさんが用意している車に乗り込んだ。でも、仮にシーズン中だったら、こ

の何倍取られるのだろうか？ そんなことを考えいると車が発射する。どうやらお客は僕一人みたいで、車は絶壁に向かっていくと、とてつもなく勾配のきつい曲がりくねった道を登り、ついさっきまで見上げていた絶壁の頂上へたどり着く。

そこから数分車で揺られたのちに、僕は一件のホテルに到着する。値段が値段だったので、それほど大したホテルを期待していなかったのだけど、これが結構きれいなホテルで若干テンションが上がる。おじさんは僕を部屋に案内すると「チエックアウトは鍵をドアにつけておいて」と説明を残し去って行った。僕はフェリーの長旅の疲れもあって、すぐに豪華なダブルベッドにもぐり込むと、そのまま深い眠りに落ちた。

七日目 AM 二度目の出会い

長い船旅のせいか、一晩中全く起きることなく朝を迎えた。

窓から差し込んでくる陽光に目を開けると、少しの間自分がどこにいて、何をしているのかわからなくなる。そうそう、今はサントリ―二にいるんだっけ。部屋をゆっくり見まわし体を起こすと、ベッド脇に置いてある腕時計に目を通した。

まだ七時を回ったくらいだったので、もうひと眠りしようかと思っただけど、良く考えたら昼過ぎにはこの島を経たなければいけないだった。

僕は勢いそのままベッドから出ると、ジーパンをはき外に出る。ホテルは古風でお洒落な小さなホテル。白とレンガ色の壁がとても奇麗に見えた。他に泊まっている客はいるのだろうか？ そんなことを考えながら通りに出ると、ホテル近辺の散策を始める。

このホテルがあるのは、どうやら島の中心部フィラから少し外れた場所らしい。イアに行くバスターミナルがあるフィラまではかなり遠いみたいだ。ならバスに乗って行こう。僕は小さなお店のおばさんにバス停の場所を聞くと、大通りにあるバス停で時間を調べようとした。

その時、バス停から出発するバスの姿が見えた。

「まさか…」と思ってバス停の時刻表を見たら、案の定今行ったバスがフィラ行きだった。じゃあ、次のバスはと見ると約二時間後。さてどうしよう。サントリ―二いられる時間は限られている。バスを待っている時間がもったいない。なら歩いて行こうか。でも、地図で見る限りは二キロほど歩かなくてはならない。

さんざん迷った挙句、僕は歩いてフィラを目指すことにした。待っている時間がもつたいないのと、飲み物を買いいに入った店のおばさんの「全然歩けるよ」の心強い後押しがあつての決断で、僕は宿に帰るとさつと身支度を整え再び外に出ると、大通りを歩き出した。見渡す限り何も無い大通りを歩く。

行き交う車を羨望の眼差しで眺めながら僕はひたすら足を動かしかし続ける。

額に汗がにじみだし、その旅に手にしたペットボトルから水を飲む。夏のシーズンじゃなくて良かった…真夏の太陽の下なら確実に干物になれる。いや、その前に歩いていこうなどとは思わなかっただろ。

ただひたすら歩く行為を続けようやくフィラに到着する。

町自体は小さな町で、もちろんビルなんて存在しない。

いかにも田舎の観光地といった風情で、小さなバスターミナルの周りにお土産屋や飲食店が並んでいるといった感じである。

僕はバスターミナルでエア（絶壁の町がある場所）行きのバスの時間を調べる。あと一時間以上余裕であつたので、少し腹ごしらえとばかりに街の中を歩き始めた。

バス停の裏側くらいに、比較的安いレストラン…ファーストフード的なお店があり、値段もそこそこだつたので僕はそこに入った。

この旅でまた食べていないギリシア料理といえば…ムサカと山羊のチーズ、フェタ。ウインドウのメニューで二つともあるのを確認する。両方頼んでも10ユーロ以下だったので、少し贅沢（貧乏旅行なのです）とばかりに注文する。

席について間もなく料理が現れる。まずはフェタ…フォークでフェタの塊を取ると恐る恐る口の中に入れる。普段日本で食べるチーズ

と違って、一言でいえば『臭みのある』味だった。より醗酵の度合いが強いというか、ぬか？ みたいというか…

それはそれでクセになる味、食感だったのでサラダとともに美味しく食べた。

次はムサカ…これはソテーしたジャガイモやナスをパイ生地のようなもので何重にもサンドイッチしたような感じかな。ギリシア、トルコなんかでも比較的ポピュラーな料理である。これは予想通りラテン系？ の味がした。ラザニアっぽいと言えいいのか…旬の野菜がとてもジューシーに口の中に広がり、その美味しさのためにしばらく僕のフィークは休むことは無かった（笑）。

空腹も満たされた僕は、しばらくターミナルの周りのお店をうろついた後、もう一度時間確認をしようと思えばバス停の時刻表の場所に向かう。

バス停でエア行きの時刻表を見上げて、時間に間違いが無いことを確認し、さあまた散策でもしようと思っただその時、僕の目の前に一人の女の子が立っていた。

七日目 AM 多国籍パーティー結成！

明らかに旅行者のいでたちの彼女は僕と目が合うと、小さく笑みをこぼす。

その笑みの中には「日本人？」といった意味合いも含まれていたので、僕はそれに答えるように先に「日本人？」と彼女に問いかけた。

緊張が解けたように彼女が人懐っこい表情になると「うん」と小さく頷く。

背はかなり小さく、髪の毛もショートだったので、女の子というよりは、少年を連想させた。

かなり旅慣れしている風情で、こういった旅に不必要？ な繊細さ……女の子らしさはあまりなく、どちらかというところと逞しい部類に入るのかな。

彼女の放つオープンなオーラが僕に緊張を忘れさせたのか、僕は彼女に近づくと、どこから来たのか……とか、日本では何をしている人？ とか、当たり前障りのない話をし始める。

名前……と言うのは、きっかけがないとお互いに聞き合わない。

特に旅先で出会う人達は『一期一会』という、線ではなく点での触れ合いを求めているように思う。

だからお互いの名前には何の意味もないのかもしれない。一日以上一緒に行動する場合は、呼ぶ時に不便なので名前を聞くようにしているが、今回は長くても数時間だろうと思った僕は、あえて名前を聞かなかった。

彼女は日本で看護師をしていて、そこを退職して一人旅をしているという。

イタリアからフェリーに乗ってギリシアに来たとのこと（二十時間くらいかかるらしい…）。

英語は殆ど話せないみたいで…人懐っこい笑顔とゼスチャーですつとヨーロッパを回ってきたらしい。

でも、これってとても凄いことで…決して簡単にできることではなかつたりする。

日本語が通じない世界で宿をとり食事をし、電車や船の切符を手配するというのは至難のワザである。

僕自身も片言の英語で何とか奮闘しているが、それでも何かしらの手違いが起こってしまう。

タイでトウクトウクの運転手に『ハードロックカフェに行つて』とお願いしたら、ストリップ劇場に連れて行かれたり…まあこれは、かなり悪意というか確信犯なんだけどね（結局ストリップに入ってしまったが…）。

あとはイタリアのレストランで、頼んでもいない豪華な料理が出てきたり（そのぶんきつちりお金は払わされた…詐欺？ 喧嘩になりかけたよ）。

まあ最終的には自分の『〜したい！』という強い思いが言葉の壁を乗り越え、自然と道が開けてくるのですが…

そんな苦労を知っている僕が、しっかりしてる人だな…と関心している。

「…でも、わたしイタリアでATMでお金おろした後、カード抜き忘れちゃったんだ」

と、まるでハンカチでも忘れたようにアッサリ言つてのけたので、僕は「大丈夫だったの？」と慌てて問う。

「日本に電話をして、カード止めてもらったからなんとか…でも、お金がおろせなくなつたのでちょっと旅の計画が変更になつたの」と、悪戯っぽく微笑んだ。

まあ、ある意味遅いというか…旅にはもってこいの性格かもしれない。

「イアに行くんだよね？」

「そうだよ。まだバスまで少し時間があるけど…」

「じゃあ一緒に行きましょう」

「そうだね」

断る理由が無かつたので僕は快く了承する。

僕たち二人がバスターミナルで待っていると、イア行きのバスが現れる。

それと同時に、一人の男性が僕たちのところへ歩いてくると看護師さんに手を振った。

看護師さんもそれに笑顔で応えるように笑顔で手を振る。

「一緒の宿に泊ってる中国の人なの」

彼女からそう説明を受けた僕はその男性に会釈する。

とても好印象な彼もイアに行くらしく「これでいいの？」と言うようにバスに指をさすと、僕は「そうだよ」とうなずく。

中国の彼を加え、少しくたびれたバスに乗り込んだ僕たちは、僕と看護師さんが隣合わせ、その前の席に中国の彼という席に座った。

まばらに客を乗せたバスがターミナルを出発する。

イアまでは30分〜40分くらいで着くみたいで、急ぎよにパーティーを組んだアジアントリオが、英語、日本語の混ぜ合わせの会話に花を咲かせた。

彼の名前は沈平…イギリスのBBCラジオに努めているみたいで、その休暇を利用してギリシアに来たとのこと。

中国から世界に飛び出して働いているということは、結構いいところの育ちで、家はちよつとしたお金持ちなのかな…

彼の仕草や僕たちへの接し方にどこことなく「お坊ちゃん」的なものを感じていた僕は、何となく納得する。

僕が抱いていた中国の人のイメージ？ とは違って、人一倍気を使い、どこまでもジェントルマンな彼の人柄に、僕はとても心地良くなる。

僕や彼女のたどたどしい英語に根気よく付き合ってくれたお陰で、いい意味でのアジアの輪が繋がり、バスの中に小さな共和国ができてはじめたその時…

「日本人の方ですか？」

新たな共和国への加入申請の声が上がっていた。

七日目 AM 僕と彼女のイーゲ海

日本人二人、中国人一人の輪の中に入ってきたのは、日本人の女性＋ドイツの男性（だったと思う）で、二人はどうやら夫婦らしい。奥さんの方が久々の日本語を懐かしむよ

うに（旦那さんとは英語で会話しているみたい）僕たちに話しかけてくる。

僕よりも少し年下かな…奥さんはとても魅力的な女性で、旦那さんもそれに見合ったハンサム（絵になるなあ）。休暇を利用した旅行中で、いろんな国を回っているらしい。

欧米人特有の筋肉質な旦那さんは、結構高価な一眼レフを肩からぶら下げていた。結構ブルジョワかも…

合計五人となったパーティがお互いの旅の話に花を咲かせる。こうやって初めて会った人たちとの、ちよつとした繋がりが僕にとって心地よかった。

線ではなく点で集まった仲間たち…お互いに同じ時間を共有して、それが終わればそれぞれの道に戻っていくという、一期一会的な関係が何度も訪れるのが旅最大の楽しさで

あり、目的なのかもしれない。

僕たちを乗せたバスはイアに到着する。

小さな駐車場に降ろされた一行は、絶景の絶壁に向かって歩き出す。歩き出して間もなくギリシア正教の教会が見え…教会まで行くと絶壁沿いに続いている道にあたり、そこから真つ青なイーゲ海を見下

ろすことができた。

眼下に広がる海と急斜面に立ち並ぶ真っ白な建物たち…その壮大な景色は陳腐な言葉で言い表せないくらい美しく、現実離れしたものだ。だった。

「凄いね…」

居合わせた全員が絶壁を見下ろす手すりから息を飲んでいて。

絶壁沿いの道はまだまだ島の端っこまで続いているみたいで、道沿いには教会や土産物、喫茶店が並んでいる。

帰りのバスまでは約一時間ほど…実際にはもう一本、三時間後のものあったが、それだと僕の帰りのフェリーに間に合いそうもない。夕方まで残るとそれはもう美しいイアか

らの夕日が見れるのだけど、それは次に訪れた時の楽しみにとっておこう。

各自の帰る時間がわからないので、とりあえず一時間後にまたこの場所に集合ということで、自由行動をとることに。

沈平さん、国際夫婦がそれぞれに散ってしまうと、そこには僕と看護師さんだけになった。

少しの間道にたむろしている野良犬たちを触っていると、看護師さんは僕を待っているのか…その場を動こうとしない。

僕は撫でていた犬の頭を軽くぼんと叩くと腰を上げた。

「えと…あっちに向かって歩こうか？」

「うん！」

笑顔で答えると、暗黙の了解のもとに彼女と一緒に行動することにした。

どんな状況でも女性の好意を無にすることはあるまい…

石段の道を二人で歩き、島の端っこ？ を目指しに歩き出す。

途中のアクセサリー屋に彼女が吸い込まれている間、僕は適当にぶらりと白い建物の通りを歩く。

ミコノスと似ているようで似ていない通りの作り…建物自体は真っ白で同じなんだけど、ミコノスが恐ろしく平坦なのに対して、ここは上下の概念がある。

建物を見ようとすれば路地（階段）を下りなければいけないし、戻するには当然上ってこないといけない。

つまり少し歩いただけで足に負担がかかり、かなりしんどいということである（汗）。

最初のうちは気分が高まっていたのでさほど気にならなかったけど、少しづつ額に汗がにじみ呼吸が荒くなる。

それでも探究心というか好奇心が勝手に足を動かし、僕は通りを歩きづつけた。

道沿いに見下ろす風景はどこをとってもポスターに見えそうな風景で、教会の青い屋根と青い海を見下ろす場所で何枚かデジカメで写真を撮る。

僕のような素人（高校時代は一応写真部だったが）が撮っても、画像は絵葉書のように美しく、ついついカメラマン気取りでデジカメに画像データを蓄積していく。

店から出てきた看護師さんが僕を見つけるとそばにやってきて、同じように青い屋根の教会越しにエーゲ海を見下ろす。

「きれいな…」

「うん」

あまりにも現実離れした青い世界が、それ以上の言葉を僕達から言葉を奪っていた。

本当に美味しいものを食べた時は言葉を無くす、まさにそんな感じであろうか…どんなきれいな言葉で湛えたとしても正確に伝えるこ

となんで出来そうにない。

おそらく一生忘れることが無いであろうその景色を、自身の「絶対に忘れない」リストに書き込むと、僕は再び看護師さんと通りを歩き出した。

七日目 PM 小さな絆と小さな家族

それから彼女は彼女と二人で、つかず離れずにイアの町中を歩いた。オフシーズンのせいで開いている店もまばらで人通りも少ない。それから少し歩くと町の端っこ？ と思われる場所に到着し…海をぼうつと眺めること以外、することが無くなった。

「これで一通りまわったみたいだね」

「うん」

「僕は次のバスで帰らなきゃいけないけど、君はどうするの？」

「せっかく来たから…もう一本後のバスで帰ろうかなって」

確かに時間があるなら僕もそうしたい。

一度は諦めたサントリー二だけど、こうやって来たからには、もっとここにいて、もっと色んなものを見てみたい…と思っていた。だから正直、まだ帰国するのがかなり先であろう彼女が羨ましかった。

「そっちはフェリーの時間あるもんね」

「うん、そうなんだ。それが無ければもう少しいるんだけど…」

残念そうに僕を見る看護士さんに複雑な笑みを浮かべてみせる。

「とりあえず元の場所まで戻ろうか」

「そうね…みんなも待ってるし」

僕と彼女は青い海から踵を返すと、来た道を引き返す。

行きの工程ほど寄り道をしなかったお陰で、わりとすぐに集合場所に戻った僕たちは、待っている面々と再会する。

「さて、みんなはどうするの？」

奥さんが一同に問いかけると、彼女を除いて全て次のバスで帰ること。

みんな、ひととおり町を見て回ったみで、これ以上時間をつぶすことが出来ない…といったところだろうか。

看護師さんをのぞいて皆、心は一つだった。

「じゃ、じゃあ、あたしも帰る」

ひとり残されるのが嫌なのか、慌てて看護師さんがそう言った。

その仕草が可愛らしくて…当人を除いた一斉が思わず笑みを浮かべた。

人懐っこいというか愛らしいというか…（汗）。

なんか家族みたいだ…その笑顔の中で僕はそんなことを考えていた。もう少しこのメンバーで行動したり、同じ宿に泊まったりすれば、もっと楽しい出来事や思い出が重なっていくんだろうな…

数年前にインド、ネパールを旅したときも同じように数名の日本人と仲良くなり…同じ宿のバルコニーでお酒を飲みながらお互いの人生観を話し、外側から日本という国について語り合った。しがらみも上下関係もないその仲間たちと過ごす時間はとても心地良く、男女関係無く数日間、僕は一人旅の寂しさを忘れることができた。

そのメンバーとネパールで豪華（笑）なステーキ屋で最後の晚餐を終え、それぞれの道に分かれた後は、何とも言えない空虚というか寂しさが込み上げてきたのを、今でもはっきりと覚えている。

ほんの数時間しかいなかったこの人達とも、そんなふうな関係にな

りつつあるのを感じていた僕は、ここでそのパーティを解散してしまつたことを、とても残念に感じていた。

看護師さんも、きつとそんなふうに感じていたから、みんなあでバスに乗って一緒の時間を過ごしたかったのだらう…

あと一日くらいいられば、みんな夕食に行ったり、もつと色々なことを話せた（外国人カップルの慣れ染めとか）のに…

という思いとは裏腹に、パーティをフィラまで戻すバスがたどり着いたので、僕はバスに乗り込むと、世界一美しい絶景に別れを告げた。

七日目 P M 別れはいつだって・・・

僕たちを乗せたバスがフィラに到着すると、ささやかなパーティ解散が行われた。

国際カッパルの夫婦が笑顔で手を振ってバス停から消えていった。いつも笑顔で、喧嘩するそぶりなど微塵も見せなかった中睦まじい二人：欧米ではよく見る光景で、とにかく男性側が圧倒的に優しい。『尻に引かれている』という日本的なものはまた違って：リスペクトしているというのが近い表現なのかもしれない。

彼らの醸し出す優しさは相手の機嫌を取る（嫌われたくないから）ためにではなく、本心からそうしているので、見ていてとても自然で羨ましくなります。

『女性』に対する価値観が日本とは全く違うから：：と行ってしまえばそれまでなのだけど僕自身も大いに賛同：：というか見習わなければいけないな：：と改めて実感。

心地のいい二人に手を振って見送っていると、沈平さんが僕の肩をぽんと叩き「see you late」と笑顔を残していった。そう言えば午後からのピレウス行のフェリー、彼も乗るんだっけ。確か途中で経由する島で降りて、そこからジェットフェリーでギリシア本土に戻るって言ってたような気がする（ジェットフェリーは値段が高いので僕には無縁だけど：：）。

お金持ち（笑）の中国人の背中を見送ると、僕は看護師さんと二人向き合う。

彼女は少し照れくさそうに笑うと、僕も恥ずかしくなって笑みをこぼす。

友達とも男女間とも違う微妙な空気の中で、どんなふうにも言葉を切りだしていいかわからなかったが、沈黙が続くともっとおかしな（

気まずい）空気になるので、僕は見切り発車的に口を開いた。

「じゃあ、僕も行くから」

「う、うん……」

まあ、何とも当たり障りのないというか……平凡な切り出し方なんだろう。

こういう時に気の利いた一言が言えたら、もっと素晴らしい人生を歩んでいただかも……

彼女も同じように、何を言葉にしたらいいのか戸惑っているみたいで、中々次の言葉が出てこない。

「あ、あの……」

「なあに……？」

あまり余計なことを考えても仕方ない……

僕は一度大きく息を吸い込むと、自分が出来る一番の笑顔を浮かべて彼女に言った。

「いい旅を！」

「うん」

彼女は表情をぱつと明るくすると、僕はそれに応えるように大きく頷く。

ベストとは言えないけど、これが精いっぱい……僕は大きく彼女に一礼をすると手を振ってパーティーの解散式に幕を下ろした。

少しの寂しさを抱えながらフィラを後にした僕は、そのまま歩いてホテルまで戻った。

ずっと日差しを浴びていて消耗していたのでホテルで少し休憩する

と、荷物をまとめてホテルを後にする。

ピレウス行のフェリーが到着する港まではバスが出ているので、ホテル近くのバス停からバスに乗り込む。バスの中では先客の沈平さんがいて手招きしていたので、躊躇うことなく彼の隣りに座ると、バスは港を目指して走り出した。

バスの中に乗っている時間は短く十分しないうちに港に着くと、僕たちはフェリーの到着までぼうつと海を眺めて過ごしていた。

港の端から身を乗り出すように海を眺めていた沈平さんの隣で、僕も同じように海を眺める。

「とてもきれいなエメラルドブルー…」沈平さんは僕にそう言う。

ええ、本当にその通りですとも。

世界中のどこを探しても、これほどまでに心を魅了する海は無い。

幻想的で美しく、毎日見ていたってきつと飽きないだろう…

いつか僕もここ（ギリシア）に住んで、毎日海を眺めるような…そんな生活を送りたい。それがどんなに退屈でも、毎日笑顔で過ごすことができると思う。

港でも水揚げされた新鮮な魚と真っ赤なトマト、ネコがいればあとは何もいらぬ。

毎日地元の連中と楽しく騒ぎ、時折海を眺めてはゼウスやポセイドン、ペルセウスの冒険といった神話に思いをはせる。

出来れば…自分が一番大切だと思える人と一緒に…

僕は沈平さんに笑顔を返すと、見納めとばかりにエーゲ海を目に焼き付けていた。

やがて大勢の人が待つ港にフェリーが到着すると、僕と沈平さんは

フェリーに乗り込んだ。

七日目 P M 友情は国境を超える？

フェリーに乗り込み荷物室に荷物を放り込むと、僕たちは上の階のセカンドクラスの客室に向かった。

客室といっても喫茶ルームのソファに勝手に座ってくださいという感じなので、早めに席を確保しようと喫茶ルームに行こうとする。六時間ほどという長旅なので、良い席でゆっくりと出来る越したことはない。

が、そんな僕を沈平さんが呼び止め「そこじゃないよ」と言った。え？ と振り向く僕に、自分たち（セカンドクラス）はあっちだと指さしたのは、ファーストフード店のような食堂と売店エリア…簡素（汚い）なテーブルと、座り心地がとても悪そう（痛そう）なプラスチックのイス、そして家族連れの大勢の人、育ち盛りの子供^{ガキ}たちが、その年代にふさわしい奇声を上げていた。どうやらこれだけは世界共通のものらしい…

午前中の披露をフェリーで癒そうと計算が音を立てて崩れていった。僕が知らなかったただけのだけど、セカンドクラスの人は喫茶ルームでなく、このエリアが正規の場所とのこと。今まで僕が気付かなかったただけで見つかったら、たぶん罰金ものだったんだろう…

でも、これからの長旅を考えると、気付かないふりをしてあっちへ戻りたい（汗）。

沈平さんは三時間ほどで解放されるけど、僕は六時間くらいこの喧騒と硬い椅子と付き合うことになるのだから…

テンションが一気に下がったのを隠しつつ、僕と沈平さんはテーブルの一つを陣取る。

二人でカプチーノを買って汚れのこびりついたテーブルにカップに置く。船はサントリーニから出航した。

さてここから三時間、沈平さんと過ごすことになるのだが、それはそれで『どうしたものか…』と考えていた。

同じ日本人とさえも知り合った間もない状態で、三時間も会話を持續させるのは至難の業である。

それを言葉も片言しか通じない異国の人と、どうやって話を盛り上げ（つたない片言英語で）よう…

まあこれは僕の性格的なもので、二人での会話に発生する沈黙が苦手なのだ。

会話で話す話題が無くなって沈黙が訪れると『何か話さなきゃ』とか『相手が退屈してる？』とか、そういった後ろめたいものが湧き上がり、気持ちばかり焦って会話が楽しめなくなる状態に陥る…まあこれは僕独特の傾向かもしれないけど、とにかくその時もそんなことを考えていた。

万国共通で外さないのは『恋話』『エロ話』（100%僕の主観）ですが、いきなり『エロ話』はマズイので無難に『恋話』を選択する。

「沈平さんは彼女いる？」まあそんな感じで切り出した話しだったけどこれが結構食い付きが良くって…そこから堰を切ったように僕達は色んな話を始めた。

どうやら彼は最近失恋して『ブローケン・ハート』らしい。同じBBCの人っぽかったので、だとしたら地元（イギリス人）の彼女だったのかな…

ソフィー・マルソーのような欧米の彼女が最大の『夢』である僕にとっては、とても羨ましい話だった。

そこから沈平さんの生い立ち…的に話が進む。

彼はどうやら中国のインターナショナルスクールに通っていたらしい。

ということは、かなりのお金持ちの家庭なんだろうなあ…英語がペラペラなのと、どこことなく育ちの良さを感じたことに納得する。

当たり前のように若い時期に海外に出て働いていることに羨ましさを感じつつ…そこから僕が住んでいる日本という国のこと、まあ当然の如く僕自身の恋愛事情、価値観に話が及んだ。

まあ隠す必要も無かったので、僕も今の彼女さんのことをフランクに話す。

どこまで通じたかわからないけど、出会ったいきさつから今の現状…僕の恋愛観を話すと彼は「それは絶対に大切にすべき相手!」と僕の目を真っすぐに見つめて言った。

「そ、そうだね…」

彼の眼差しがあまりにも真剣だったので、僕は押し切られるようにうなずいた。

それ以上僕が何も言わなかったので、そこで一通りの『恋話』に終止符が打たれてしまう。

彼が何故そこまで真剣に助言してくれたのか聞きたかったけど…それは何年も経った今も謎のままだ(笑)。

お互いの笑い話や身の上話を何とか単語を繋ぎ合せていた僕は、ふとあることを彼に聞いてみたくなった。

それは個人的なことではなく国民性というか、お互いにとっての忌まわしい過去の歴史のことであつた…

七日目 P M See You Late!

結果的に言うと、僕はそのことを彼に聞くことが出来なかった。

僕が中国人である彼に何を聞いたかったかと言うと『日本』に対する感情であった。

前年だったっけ…僕はテレビでとてもセンセーショナルな光景を目にしていた。

それはサッカーのアジア選手権で、日本代表チームは中国の重慶という地域のサッカー場でアジア勢を相手に試合をしていた。

僕は当然のごとく日本代表に声援を送っていたのだけど、テレビから聞こえる声はスタジアムいっぱいに響き渡る日本代表へのブーイング…最初は気のせい？かと思っただけど、それは間違いなく明らか意志を持って日本代表に浴びせかけられていた。

聞けば、第二次世界大戦中に日本帝国軍が重慶に対して大規模な爆撃を行って多数の死傷者を出したの…らしい。それ以来ずっと反日の感情を抱き続けていて、それがブーイングという形となって表れたとのことであったが…僕にはその光景がとても異様なものと思えた。

僕自身は戦争を教科書でしか知らない。

中国に対して酷いことを行ったという知識はあるけど、それは過去の人たちの誤ちであって、現代の僕たちは何も知らない…

少し無責任な言い方かもしれないけど、戦争を知らない僕たちの世代にとって戦争は遠い過去であり、それを現実として感じることなく映画やドラマの中でしかない。

もう少し補足するなら…僕達日本人だつてアメリカとの戦争で多くの国民が命を落としているし、実験のため（だと僕は思う）の原爆で何十万の罪の無い市民が犠牲になっている。でも僕自身はそれを行ったアメリカに対して何の敵意も感じない（自分の肉親が犠牲になっていたらどうかはわからないけど）。

僕にとっては…いや、戦争を知らない世代にとっての戦争は過去であり、非現実的なお伽噺みたいなものだと思う。

でも、彼達にとって戦争は過去のものではなかった…

中国の取っている反日政策もあるのだろうけど、日本に対する敵意は凄まじいもので、日本の選手がボールを持つたびに観客全員が心をつつにして怒声を浴びせかけていた。

（サントスは違つたろう…と思いつつ）。

でも、目の前にいる青年からはそんなオーラは微塵も感じられなかった。

むしろ僕達日本人に対してとても親しみを持っているように思えた。

早くから多くの外国の人と接し視野が広いせいか、自国の中国という国を一度外に出てから見ているせいか…

とにかく僕が思う中国の人のイメージと大きくかけ離れていた。

いや、ひよつとして僕自身が抱いている中国の人へのイメージも先入観なのかもしれない…

そういつた思考を英語に構築する作業と、その場の空気が気まずくなるのでは？ との懸念から僕はその質問を最後まで彼にぶつけることができなかった。

それからしばらく彼と話し、お互いの住所の交換をしあった。

「日本に来たら是非遊びに来て。それまでに英語上手くなっておくから」
話す話題に尽き沈黙が訪れたので、僕は自然とテーブルに突っ伏して寝てしまった。

それから少しして船は中継の島（たぶんシロス島）到着した。

船の挙動の変化で目を覚ました僕は、テーブルに落ちたよだれを拭きながら沈平さんに「おはよう」を言う。

「ここでお別れだね」

「うん…」

沈平さんと頷き合うと僕は彼とともに席を立った。

なんだかここで別れるのが少し寂しかったので、彼を港まで見送ろうと思ったのだ。

彼にそれを伝えると快く了承してくれたので、僕達二人は共に食堂から出てタラップを降りる。

沈平さんとしつかり握手をすると笑顔でお互いに「さよなら」と言い合った。

リュックを担いだ彼の背中に手を振って船内に戻ると船が出港する。再びひとりになった僕は、本当にすることが無くなったので再び眠りの世界の扉を叩いていた。

七日目 P M 港に待つもの…

人間はいざとなれば何処でだって寝れる。

夢と現実のまどろみの中でそんなことを考えていると、船が速度を落としていった。

船内アナウンスでピレウスに『間もなく到着する』の音が聞こえたと、ようやく何かしらの動きが取れることにほっと溜息をついた。

旅をしているとおのずと何もせずに待つ…という行為が増える。

バスや列車の到着を待つこともそうだし、それに乗って目的地まで行く同中もそうだ。

貧乏旅行を自負している僕にとっては移動の手段に飛行機に乗る事はまれで、大抵値段の安いバス、列車…今回のようなフェリーになったりする（それもセカンドクラス席）。

過去の例をあげればインドからネパールへのバス。オンボロで錆びだらけ…板みたいなのシートに一日揺られて行ったのだが…過酷過酷（笑）。途中で川の増水もあって流れる川にタイヤを沈ませながら渡ったりと、あまりいい思い出はなかったりする。

でもそれによつて出会った人、飛行機では決して見ることでできない風景…たとえば観光ガイドには決して載っていない現地の人の集落に立ち寄ったりと、そう言う貴重でかけがえのない思い出も発生したりするので、一概に悪いことばかりとも言えないのである。

でも、インドに行く途中のバスでホモのおじさんに迫られたときは少し焦りましたが…（笑）。

その当時の僕は髪がかなり長く、そっち系の人に見えたのかもしれない（もしかして今も？）

ようやく次の行動が取れることで気持ちも前向きになると、僕は席を立ち何度か伸びをする。

窓の外は真っ暗で何も見えない。漆黒の向こうに待っているのはエーゲ海：この旅が始まったピレウスである。

ようやく僕の旅も終わりを告げることになる。

まだピレウスもギリシアで本当の終わりじゃないんだけど…不思議にそうは思えなかった。

僕にとって、ギリシア本土とエーゲ海の島々は何故か全く別の国という認識が出来上がったいてせいだ…

ピレウスについてすることは簡単である。今夜一晚を過ごす宿を見つけるだけだ。

安い宿のあたりはつけているので、そこに行き宿をとり（たぶん空いている）、明日までただひたすら寝るだけ。ちよつと安い居酒屋でお酒でも飲みたいとも思ったけど、もうそんな余力は無いだらう…

そんなことを考えているうちにフェリーがピレウスの港に到着する。荷物をまとめてタラップを降りると、オレンジの照明で薄暗いピレウス港の地を再び踏みしめる。

相棒のリユックをかつぎ港を出た僕は、ガイドブックの地図をたよりにホテルを指す。

潮の香りに鼻孔をくすぐられながら通りを20分ほど歩くと、ホテル『アンフィトリオン』があるの場所まで到着する。

でも、夜で暗いせいか中々見つからない。ビルとビルの間を何度も往復しながら探して、居酒屋でたむろしているおじさん達に聞いてようやくその宿を見つけた。

1930年代：アル・カポネの年代に出来たような古い（ぼろい）ホテルの玄関から受け付けに行つて、おじさんに今夜の宿の空きを尋ねる。

当然のことながら空いていたので、僕は値切ることもしせず（くらいに安い）にキーを貰い、これまた1930年代のようなエレベーターに乗つて部屋に到着すると、リュックを床に投げ出してベッドにダイブした。

八日目 AM エフカリスト！きつとまた戻ってくるぞ！

朝の光にさらされ、僕は老朽ホテルの狭い部屋のベッドで目を覚ました。

ぼんやりとした視界で薄汚れた天井をぼうつと眺めつつ、僕はこれがギリシアで過ごす最後の日なんだということを実感していた。旅には必ず終わりが待っている…だから旅なんだ。

頭ではわかっていても、この寂しいような…でも心のどこかで『終わった…』とほっとしている複雑な感覚は、これまでの旅でも何度か体験しているのだけど…やはり慣れることはできない。

この旅での起こったことは本当にハードで心身ともに疲労の連続だったけど、それでも振り返った自身の薄っぺらいせい（笑）人生の中で、本当に充実し輝きに満ちていたと思う。

色んな人に出会い、写真でしか見たことの無い色んな風景を見て、失敗し失敗し稀に目の覚めるような成功して…そして数ミリ単位の成長もできたのでは…とも思う。

でもまあ…この成長は、物事の本質や人の心の流れを冷静に、かつ鋭く見るための成長なのだと思う。

物書きを目指している僕にとって、それはとても重要で必要なことではあるのだけど…それが故に見えすぎてしまうことも多々あって、時々それが本当に必要な成長だったのかどうかと迷うことがある。

今まで見えてこなかったものが見えてくると、当然のことながら僕の周囲にいる人達とも見えるものが違ってくるわけで…それは時として大きな軋轢を生み、今まで自分が心地良かった場所がとても息苦しくなって、結局はその場所を失う結果になってしまう…

僕が偉くなったとか、賢くなったとかそういうことでは無くって、決定的に埋めることのできない溝ができてしまう…と言った方が正しいのだろうか。

そうやって一歩、また一歩と孤独になっってしまうような気がするのだけど、でも道は前にしかなく…進むしかない。きつとどこかに繋がってるんだと思うのだけど、今のところ何処にも繋がってないような気がする…

果たして今回のギリシアの旅は、僕をこの先どこへ導いてくれるのだろうか…

まあ…いずれ答えは出るだろう。

僕の人生はまだまだ不完全で、本当に『自分』の人生を実感し歩き始めたのは、つい最近のことである。

何が待ってるかはわからないけど、導きに身を任せていれば…いずれ自分の目指している方向に何かの光は見えるはず。

思考が次第にはつきりしてくると、僕はベッドから出る。チェックアウトまでは本当に何もすることがない。

空港にはお昼くらいに着けばいいからそれ程焦る必要もなく、僕はそれから少しの間、硬いベッドのシーツに頬を押し付けていた。

荷物の整理やら、トランジットのチェックを済ませると僕は下のロビーに降りて行き、主人にチェックアウトを告げる。

これまで何千人…いや何万の人を停めてきた主人はそっけなく僕を目で見送ると、読みかけの本に視線を落としていた。

ホテルを出た僕は朝の光の中、ピレウスの駅まで戻っていった。

港の脇を歩きながら、今からエーゲ海の島々に散っていく船を眺め

…ミコノスに行く船、サントリーニに行く船の間で迷っていた自分を思い出し、少し楽しい気分になった。

迷ってるときって…本当はすでに心の中に答えはあって、その『決定劇』を演出するために迷うフリをしているのでは？

そんなことを考えながら、駅近くのファーストフードの店、今回行けずにいたトルコへのチケットを売っていた旅行代理店を通り抜け、僕はピレウスの駅にたどり着いた。

ピレウスから電車の乗り、そこからアテネへと向かう。

約一週間ぶりに乗る電車は、何故だかとても懐かしく…通勤で使ってる電車のように思えた。

来た時と同じ道のりを揺られながらアテネのシンタグマ駅に到着すると、僕は地下鉄を出て空港に行くためのバスに乗るべくバス停に向かう。

ここまでではなにも問題は無い、飛行機の時間にも十分時間がある。

今回はトラブルなく帰れそう…そんなことを考えながらバス停にたどり着いた僕を待っていたのは、旅の最後を飾るに相応しい厄介な事態であった。

八日目 AM グランドファイナル

バスターミナルに着いた僕を待っていたのは多くの人の山ばかりであつた。

広場の中の大きなバスのロータリーには、それこそコンサートでもしてるのでは…？ と思えるような大勢の人がいて、それぞれが看板を持ってたり、声を大にして何かを訴

えかけていた。

戦争反対のデモかなんかかな…その光景をのんきに眺めながら、僕は空港行きのバス停の前に立つ。

バス到着まで時間が迫っている割には待っている人が少ない…僕を含めて数名ほどだろうか。

僕はバス停を間違っているのではないかと不安になるとガイドブックを取り出し確認する。

たしかにこのバス停であつている。

首を傾げながら待っていると、やがてバス到着の時間になる…が、バスは一向に姿を見せる気配がない…

どうということ…？

頭の中にクエスチョンマークを浮かべていると、隣で待つ家族旅行の一団も異変に気付いたのか、近くを歩いている人に話を聞きだした。

4人家族のお父さんらしき人が地元の人に話を聞き終わると、その様子を眺めていた僕に近づいてくる。

「ここで待っていてもバスは来ない。どうやらストライキらしい」

お手上げ…というようにそう言う。
どうやらギリシアではこの手のストがちよこちよこ起るらしく…
運悪くその日に当たってしまったというわけだ。
さて、どうしたらいいものか…飛行機の時間までには少し余裕があるけど、バスが使えないとなるとタクシーか電車ということになる。
予算的にタクシーは無理だとして残された道は…

そう考えていると、お父さんが僕に向かって「ついてきなさい」という身ぶりをみせた。

お父さんは奥さん、まだ小学校くらいの息子さん二人を連れ急ぎ足でロータリーから離れると、地下鉄の駅へと向かっていく。
僕も彼達の後について地下鉄の駅へ向かう。

ガイドブックに空港までの電車の経路が載っていたのだが路線が複雑で乗り換えなどがあって正直あまり使いたくなかった。

路線を一本間違えればとんでない所へ連れて行かれそうだし、そうなったら時間に間に合わない可能性だってある。

そういうリスクはなるべく避けるたいがためのバスだったのに…

僕は不安を抱えたまま、それでも自信満々に駅に目指すお父さんに「この家族について行けば大丈夫」と自分に言い聞かせる。

きつと空港への行き方も熟知してるはずだと…

駅に着いたお父さんは駅員らしき人をつかまえると、ガイドブックを開き空港への行き方を聞き始めた。

やばい…このお父さんも僕と同じ熟知レベルだったのか。

少し後悔するももう遅い…駅員に頷くお父さんを祈るように眺めながら、僕はこの家族と運命を共にする腹をくくった。

説明を聞き終えたお父さんが駅員に礼を言つと僕についてくるよう

に促す。

切符を買い改札を通り、僕はよくわからないまま彼らたちと一緒に来た電車に乗り込んだ。

電車が発車すると僕達はようやく笑顔を交わし合う。お父さんたち一行はオランダ人の観光客らしかった。

おとなしそうな奥さんと、笑顔が可愛い二人の兄弟：お父さんは家族の長らしく「大丈夫」と子供達に言い聞かせているみただが、その当人たちは不安がるより、むしろ突然のハプニングを楽しんでいるようだった。

そこから数駅のちに僕達は電車を降りる。

乗り換えのためにホームを移り、ようやく空港へ向かう電車へと乗り込むことができた。

この電車であつてなのかな？ そんな不安はすぐに杞憂に変わる。空港行きの電車は椅子が横向きに配置（長距離列車みたいに）されていて、通勤電車とは明らかに違う作りだったし、車内の電光掲示板には「AIRPORT」としつかり表示

示されていた。

僕は安堵のため息をつく。

オランダ大家族は向かい合った席に腰掛けたために、そこで僕はお父さんに「ありがとう」を言つて背を向けると、離れた席に向かった。

子供達の笑顔を背に僕は少しだけ寂しい気分になった。

上手い表現が見つからないけど…共に戦った（笑）仲間と別れるような感じといえはいいのだろうか。

席に着いた僕はようやく落ち着く…空港につくまでの約一時間をゆつくり過ごす。

窓の外をぼうつと眺めながら、ギリシアに来てからの色んな出来事を振り返る。

ギリシアに来たことを後悔した初日のパルテノン神殿：窮屈な二等船室の椅子で寝違えそうになりながら過ごしたクレタ島までの航路…ミコノスカサントリーニのどちらをとるか迷ったピレウス港、幻想的なミコノスの町、大好きな猫達、ちよつと心残り？ なサカキさんと過ごした夜：サントリーニで出会った多国籍の仲間の面々：

車窓から流れる景色が心地良く僕を睡魔に誘い出した頃…ふと背中越しに声をかけられる。

振り向くと車掌（駅員？）らしき人がなにやら僕に切符を見せるように言っていた。

僕が差しだした切符を確認すると車掌さんは残念そうに「空港行き

の電車には特別な切符がある」と説明を始めた。

ガイドブックの片隅にも載っていたのだが、この特別切符が無い場合、違反として罰金を払わなければいけないらしく…どうやらこの人は車掌では無く、その係の人のようであった。

罰金額は15ユーロほど…これは痛い。

僕は何とか「許してください」と頭を下げお願いしたが、当然無理であった。

仕方なく15ユーロを罰金として払うと、係りの人は「まいどあり」の笑顔を残し次のターゲットをであるオランダ人家族に向かった。

係員はオランダ人家族にも同じように切符の提出を求め、同じように15ユーロずつ巻き上げて行った。

僕が思うに…これはトラップというか、あまり事情をよく知らない外人目当ての「強制徴収劇」であり貴重な「財源」なんだと思う。

これにひっかかるのは僕を含めて特別切符のことを知らないギリシ

ア人以外の観光客だろうし…
ちよつと意地悪というかセコイ（汗）。

計算外の15ユーロ消滅はあったものの何とか空港にたどり着いた僕は、オランダ人一家に手を振って受付に向かった。

空港内の両替所でユーロから円に替えてもらう。換金レートやけに悪いのか手数料が高すぎるのか…予想を遥かに下回る円を受け取った僕は、さつさと受付で手続きを済ませ待合室のソファに腰を落ち着けた。

あとは飛行機に乗って日本に帰るだけである。この旅でのギリシアでの行程は全て終わったのだ。

この地を去る寂しさと、日常に戻るといふ安堵感が僕の中で複雑に交差する。

はたして今回の旅で僕は何を日本に持ち帰ることができるのだろうか…

いつも旅の終わりには、この旅で掴んだ「何か」を帰ってから生かそうと思っただけ…それが上手くいったためしがない。

僕自身の性格にもよるのだろうけど…こうやって異国の地で色んな人に出会って経験を重ねて行けばいくほど、日本に帰ってから日常で接する人との距離が遠くなっているような気がするのだ。

どんどん乖離していっていると言うか、大きな埋められない溝ができて言っていると言うか…

それは僕自身が前とは違う視点で物を見るようになったせいなのか、それとも逆に視野が狭くなっているのか…正直言っただけわからない。周りとの考え方や生き方のギャップが大き過ぎて、自分に自信が持てなくなる時も多々ある…

でも、これは僕にとって必要なことであるのだと思う。

導きがどこに向かっているのかわからないけど…たとえ多くの人が自分から離れていったとしても、本当に必要な人さえ自分のそばにいれば、それはたぶん幸せな人生なんだと思う。

そのために僕はこうやって旅をして、自己満足的な成長（笑）を重ねているのだろう。

それはこれから先もずっと続き、その度に色んなものを失って…でもその果てに、本当に必要な「何か」が見えてくるのだと希望的に考えることにしよう。

海外の旅から帰ると、ほんの少し日本という国を新鮮に…いや、もう少し正確に表現すると全く違う国と感ずる一瞬がある。

時間にして一時間程度だろうか…僕の場合でいうと関西空港から電車に乗って家に帰るくらいの時間だ。

空港を出て電車に乗り、行く時に見た風景と同じものを車窓から見るのだが…行く時とは全く違う風景に見え、駅のホームにいる人達…学生さんとかが他のアジアの国の人に

見えるのだ。見なれた街の風景、家やらビルでさえも他の国の風景に見え…自分が本当に帰ってきたのかどうかわからなくなる感覚に陥る時がある。

日本を離れ日常から切り離すことで、初めて見える「日本国」の素顔というか…

きっと海外の人が初めて日本を訪れたらこんな感覚なんだろうな、とも思ったりもする。

それを経験するだけでも…日本を離れてみる価値は十分にあるのかもしれない。

今回も帰って日本の地を踏みしめたら、きっとそれを感じるだろう。

ギリシアでの経験が、今度は僕をどこへ導いてくれるのだろうか…きつといつものように過酷で大変な道を選択させるんだろうけど…どんと来い！」である。

人生は過酷であるなら過酷であるほど充実してるし…その中に得られる小さな輝きが宝石のように美しく、そこに生きている価値を見出すことができる。

それは旅と同じで…ひよっとしてそれを確認するために、僕は旅を続けているのかもしれない。

いや、間違いなくそうだろう…

ギリシアでの旅が終わったと同時に、まだまだ続くであろう旅がまた始まるのだ。

次はどんな苦勞が待ち構えてるのだろうか…僕はそれを想像しながらも思わず口元をほころばせると、ギリシアの地を離れるべく搭乗口から飛行機に乗り込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0077f/>

エはエーゲ海のエ ~ギリシア旅日記~

2010年12月12日08時30分発行